

---

# 永遠への出会い

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠への出会い

### 【Zコード】

Z5622C

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

名探偵コナン、ハヤテの「とく！コラボ小説第一弾。コナン対キッド対ハヤテの続編です。剣道の試合の応援のために白皇学院へとやって来た新一。そこでハヤテと再会するが、再び波乱の運命が彼らを待ち受けていた。占拠され、外界との連絡が取れない中で、彼らに活路はあるのか？

## 始まり（前書き）

ええ、まざお詫び申し上げます。失われし物を求めての続編を書かず、じつは書いてしまいました。作者より心からお詫び申し上げます。

あの三千院家での出来事から半年、江戸川コナンこと工藤新一は無事元に戻り、さらには組織を倒すことに成功していた。私生活ではようやく帝丹高校に復学し、休んでいた分の補充授業や実力テストを全て終え、コナンになる前の日常をようやく取り戻していた。

さて、そんなある日のこと。彼が下校しようとしていた所、彼に相談する一人の同級生がいた。

「工藤君。突然ですいませんが、良いですか？」

1人の女顔でメガネをかけた生徒が新一を呼び止めた。

「なんだ。本堂じゃないか、どうした？」

彼に話し掛けたのは、コナンであつたときに転校してきた本堂瑛祐であつた。CIAである父を持ち、さらに黒の組織へ潜入中だつた水無怜奈を姉に持つ彼とは、黒の組織との戦いの中で色々とあつたが、今は良き同級生である。

「工藤君は僕が剣道部に所属しているのは知っていますよね？」

「ああ。」

瑛祐が今所属しているのは、顔や外見に比べて全く似合わない剣道部である。

「実は今度の日曜日に他校との交流試合があるんですけど、困ったことに部員が僕以外全員食中毒で倒れてしまつて出られなくなつてしまつたんですよ。まさか1人だけで出るわけにもいきません。誰でもいいんですよ、助つ人になる人を探しているんです。誰か心当たりありますか？」

新一は全員が食中毒というのは正直呆れたが、剣道の助つ人という言葉には、大いに心当たりがある。

「いるよ。1人。なんなら今すぐ聞いてみよつか？」

そう言つた途端、瑛祐の顔が明るい物となる。

「本當ですか。ありがとうござります。」

新一は携帯電話を出し、その人物に早速連絡を取る。

「もしもし？」

「もしもし。服部、俺だ。」

電話の相手は、西の高校生名探偵、服部平次だった。

「おお、工藤やんか。なんや、また事件でも起きたんか？」

「違ひつ、実はだ……というわけなんだが。」

新一は平次に瑛祐から頼まれたことを話す。それに対する平次の回答は。

「おおいいで、工藤と会える機会が増えるんならなんだってええわ。」

新一と会える機会が出来たせいか、すうぐ声が弾んでいる。

(全くこつは。)

新一は半ば呆れ気味となりながらも、とうあえず礼は言つておく。

「じゃまあよろしく頼むぜ。」

「ほんなら日曜にな。」

そして二人の会話は終わった。

「OKだつてや。」

「あ、あつがどいわ。あ、けど相手の学校の名前いつの忘れちゃいました。」

瑛祐がしまつたといふ表情をする。

「いこよ、またメールしつくから。けど、相手つてどーじだ?」

平次が来ればそれなりに心強いとは思つてゐるが、念のため確認しておぐ。

「白皇学院です。私立の。」

そう言われ、一瞬、半年前のことが頭をよぎった新一であった。

一方同じ頃、白皇学院では、下校しようとしていた三千院家の借金執事綾崎ハヤテが、1人の少女に呼び止められていた。

「ハヤテ君！」

「あれ、ヒナギクさん。どうしたんです？」

ハヤテに声をかけたのは、ピンク色の長い髪を持つ同年代の美少女。一年生にして生徒会会長であり、最強生徒会長の異名を持つ桂ヒナギクであった。

「ねえハヤテ君。ちょっとお願いがあるんだけど。」

「はい。なんでしょう？」

彼女からの頼みとは一体なんだらうとハヤテは思った。ハヤテか

ら彼女に何か頼んだり世話になつたりすることはあるが、逆は珍しいからだ。

「実は今度の日曜日に、剣道部の他校との交流試合があるんだけど、部員の殆どが出られなくて、このままだと私一人になっちゃいそうなのよ。けど体面的にそれはまずいから、一日だけでいいの。助つ人として来てくれない? ハヤテ君剣道少しきらいは出来るでしょ?」

ヒナギクは剣道部の部長も兼ねている。白皇の剣道部自体は学校の規模に反比例して人気が無く、元々小さい。それでも、確かにヒナギク一人だけで戦うとなると少し厳しいだろう。

しかし、それでも全員が出席不能とはどういふことであらうか。ハヤテはちょっと気になつた。

「あの、おひしゃくをやめておひなさんになくなつたんですね。」

「それがね、私にもあまりよくわからないのよ。なんか東宮君が先頭になつて、特訓するとか言つてたんだけど、そしたら全員全治2週間の怪我をしちやつて。」

ヒナギクは不思議そうな顔をしていたが、ハヤテにはその言葉で  
だいたいのことは予想できていた。東宮というのは剣道部部員であ  
るお坊ちゃんであるが、その彼はヒナギク大好き人間である。特訓  
とは彼女に良い所を見せようと考へたのだろう。しかし、それで怪  
我をしたということは大方その執事の野ノ原が一枚かんでいるに違  
いない。

とりあえず、事情はわかった。そして、ハヤテには断わる理由もなかったし、それに田代のお世話になつてゐるのだから、それくら

いしてあげようと思つた。

「事情はわかりましたヒナギクさん。いいですよ、助つ人になります。ただし、取り敢えずお嬢様の許可を取らないといけないので、ちゃんとした返事は、また夜になつたらメールでします。」

「わかつたわ。ありがとう、ハヤテ君。」

そしてヒナギクは行つてしまつた。

じつして、運命の糸に導かれるように、彼らは再び出立つ未来へと歩み始めた。

## 始まり（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 出会いへ向けて

「ええ……平次君が助つ人として白皇学院で試合するの……」

瑛祐に頼まれた翌日、新一が恋人（既にそういう関係といふことにして下さい）の蘭と一緒に登校している途中、昨日のことを話したのだが、彼女が発した一言田の言葉がこれである。しかも、大声で。

「そんな大声で喋るなよ！」

突然大声を叫ばれたことで、しかめつ面をする新一。

「だつて、白皇つていつたらあの名門校だよ。一度は見てみたいじゃない。ねえ私たちも行けるのかな？」

蘭が目を輝かせて聞いてくる。

「さあ？詳しいことは本堂に聞いてみないとわからないけど、多分、応援つてことで行けるとは思つよ。」

「本当……一体どんな学校かしら……そういえば、半年前の事件で会つたハヤテ

君も白皇学院の生徒だつたわよね。もしかしたら会えるかも。」

蘭がそんなこと言つたが、新一は頭から否定する。

「無理無理。白皇学院は確かに小中高あわせたでかい学校だぜ。その中から一人と出会うなんて絶対不可能だぜ。」

実際のところ新一は白皇学院へ行ったことはない。だから推測で言つたのだが。蘭にしてみれば夢を壊されたようで良い気はしない。

「あら。行つてみなきゃわからないじゃない。夢が無いわね。第一新一は・・・」

「うし恒例とも言つべき一人の口げんかが始まるわけである。口げんかだと新一は理論を駆使して結構蘭を言い負かす事が多い。事実この時もそうなった。しかし、もし新一が

未来を見ることが出来たら、一体どのような顔をしたであろうか。

ところ変わつて、ついでに時間も少し遡つて。前日夜、三千院家では。

「何? ヒナギクの助つ人! ?」

屋敷の主である三千院ナギが、相変わらずの不機嫌顔でハヤテに対して言つた。

「やつです・・・・・あの、やつぱりだめでした？」

ハヤテは3ヶ月ほど前に、マリアからナギと共にクリスマスの誤解のこと（詳しくはハヤテの「」とく（一巻参照）を聞かされた。その時、ナギはもう一度ハヤテに告白したわけだが、結局、ハヤテは返事を保留にしてくる。その結果、ハヤテを同級生である西沢歩、桂ヒナギク（この作中では既に告白済）、そしてハヤテの主であるナギが奪い合う3つ巴でのハヤテ争奪戦状態となっている。もっとも、当の本人がまったく付き合つ気がないのが問題といえば問題である。

閑話休題。そういうわけであるから、ライバルの利益になることをナギは喜ばない。まあハヤテが他の女性と付き合つたりと白に目で見るのは以前からだが。

しかし、ナギが言つたのは予想外な言葉であった。

「いや、ダメではない。その代わりにだ。」「

ハヤテに緊張が走る。

（代わりって何だ？）

「私も応援に行く！」「

「え！」「

ハヤテが驚きの声を上げる。

「何だ？私が応援に行つては行けないのか？」

「いいえ、そういうわけでは。」

（怒られると思ったのに？）

ハヤテは何か拍子抜けしてしまった。

一方、ナギの腹の内がどうであつたかといふと。

（ヒナギクの助つ人というのは気に入らないが、ハヤテの格好いい姿を見れるなら、それはそれで悪くない。それに、私がついていけばヒナギクも下手な手には出ないだろう。）

そういう打算があつたわけだ。

しかし、彼らは日曜日を迎えることとなる。

## 出会いへ向けて（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

もうじつしてこむつちに、日曜日を迎えた。

大阪からの助っ人である服部平次と、その幼馴染である（こちらは恋人関係なのに本人たちが認めていない）遠山和葉の二人は時間通りに、TR米花駅に到着した。

「蘭ちゃん、世話になるで！」

「工藤、久しぶりやな。」

「」最近、一組とも忙しかったから久しぶりの再会である。

「急に頼んじまつてわるかつたな服部。」

「良いんや、親友からの頼みやから。けど、なんでこんなにに出迎えがあるんや？」

実は、二人を出迎えたのは、新一と蘭だけではなかつた。なんと少年探偵団（含む哀）までいる。

「ははは・・・情報源はわからないんだけ、聞きつけたらしくて。」

「「「今日一日よろしくお願ひします。」」（b y二人組）

3人組の元気な声が響くが、反比例して新一の心は暗い。それもそうだ、余計なお荷物を抱え込んでしまったのだから。

「まあ工藤そんな落ち込むな。それよりも、今日頼んできた奴はどうしたんや？」

「ああ、本堂なら少し遅れて来る。」

本来出迎えるべき瑛祐の姿はまだなかつた。

「そりなんや。それはそつと、その白皇学院の剣道部つて強いんか？弱すぎて相手にならへんつちゅうのもつまらんからな。」

「平次、それ油断しそぎちやう？」

平次の少し相手をなめた発言に、和葉が警告をあたえる。

一方、答えるべき新一は、相手の実力をよく知らない。確かに白皇自体はすごいが、その部活が強いかまではわからない。

「さあ、俺にはわかんねえ。あとで本堂に聞いてみるといいよ。」

結局そう言つてお茶を濁した。

まさか彼も、その相手がたつた一人とは考えられるはずもなかつた。

一方、そのころは白皇学院では。

「ねえねえ、美希ちゃん理沙チ。今日の剣道部の練習試合、ヒナちゃん」とハヤ太君の2人だけでやるんだってね。」

白皇学院の中で、場違いなような奇抜な建物が一つあつたが、その中で笑顔がよく似合う少女が、他の2人の少女と話し合っている。

「それはおもしろいそうだな。美希もそう思つだろ?」

「確かに、あの2人組ならず」く面白い映像が撮れるかもしない。これは動画研究部として放つておくことは出来ない事態だな。」

実はここ、白皇学院動画研究部の部室。室内にいるのは、セリフを言つた順に瀬川泉、朝風理沙、そして花菱美希の落ちこぼれ・・・

「「「誰が落ちこぼれだ!」」」

「・・・生徒会3人娘だ。この動画研究部、活動方針はよくわからぬが、取りあえず、人の恥ずかしい映像を撮つていることが多い。ハヤテも何度もその犠牲になつている、それこそ、白皇学院のがん細胞ともいえる、迷惑千万な部活・・・

・・・

「「「人聞きの悪い事言つな…」…といつか作者が私情を交えるんじ  
やない…」」

・・・いいじゃないかちょっととぐらい。

「つたぐ、まあこんなバカな作者は放つておいて、理沙、泉。動画  
研究部の出番よ…」

「「 わお…」」

というわけで、生徒会3人娘出動である。

いつして、新たな要素が動き出した。

## 運命の口（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 衝撃の再会

新一達御一行は白皇学院へとやつて来た。

「でつけえーーー！」

「本当に広いわね。」

新一と蘭が感嘆の声を上げる。他のメンバーももちろん驚いている。

「東京には」こんなでかい学校があるんやなーーー！」

平次も感心したよう言つて。

「それにしても、あの時計塔すつーーーおしゃれひやう？」

和葉が学院の真ん中あたりにある時計塔を指差しながら言った。

「本当だね。一度登つて見たいわね。」

女性陣がそういう会話を始めるが、彼らは決して学校を見に来たわけではない。

「あのな、俺たちは剣道部の試合に来てるんや。で、ここからどうするん？」

その質問に対し、瑛祐が答える。

「ああ、それだつたら迎えの人が来てくれる予定です。」

「ああ、そうか。つていつのまにか探偵団の連中が見えねえぞ！..」

あの3人組と哀が忽然と姿を消していた。

「あの3人なら学校の中回るつて行つてたで。まあ、あの姉ちゃんが追いかけてつたし、いざとなつたらその携帯で呼び出せばいいんとちやう？」

平次が楽観的な意見を言つが、まあ確かに哀が付いていて、しかも携帯で連絡を取れるのだから、大丈夫だろ。まさか、いきなり黒服の警備員に、「君たち不審者ですね？」とか言われて捕まるとも思えない。

「それもそつだな。じゃあ俺たちは「帝丹高校剣道部の方ですか？」

新一が話している途中で、いきなり声が掛けられた。

「「「「……」」」

そちらを振り向くと、剣道用の服を着込んだ、青色の髪をした人物が立つていた。そして、蘭と新一にはとても懐かしい人物であつた。

「「あ！..」」

「あ！」

新一と蘭、そしてその人物 ハヤテが同時に驚きの声を発した。

半年ぶりにこんな所で

再会するなどどちらも思っていなかつたからだ。

それを見て、平次が一言。

「何や、工藤に毛利の姉ちゃん、その姉ちゃんと知り合いなん?」

平次がハヤテを女子と誤解した。その瞬間。

ピキ!!

その言葉にハヤテが強く反応した。確かに、ハヤテは女顔で、今は剣道の装備一式つけているから、女子と判断できなくもないが、やはり本人にはショックであった。

それを悟ったかはわからないが、新一が慌てて訂正する。

「服部、この人は綾崎ハヤテと言う、れつきとした男だぞ!…」

その言葉に、慌てて謝罪する平次。

「あ、すまん。えっと、その顔が女子に見えたもんで。」

「いいですよ。生まれつきですから。」

ハヤテは気にしないそぶりをするが、あからさまに気にしているのがわかる。場の空気が一気に重くなつた。

「ちよっと、ハヤテ君。久しぶりにあったのにそんな暗くならないで。」

蘭が慰めの言葉をかける。それに答えるかのよう、ハヤテも暗い空気を吹き飛ばす。

「そうですね。では気を取り直して。お久しぶりです蘭さん。それに……」工藤君。

3人はこいつして半年ぶりに再会した。

その様子を影から見守る6つの目があった。

「やるなあの男。美希、あいつ誰か判るか？」

草むらに隠れてカメラを回しているのは誰か、生徒会三人娘だ。今は喋ったのは理沙だ。

「あれは西の高校生探偵と呼ばれる服部平次だ。」

情報収集が得意な美希が答える。

「へええ、じゃあ東西の高校生探偵がそろつたって事？」

興味深々で言つるのは泉だ。

「やつなるな。けど、確かあの服部平次は剣道もプロのはず。なぜこじこじいるのかはわか

らないが、もしヒナと戦つのなら、おもしろい戦いが見れそうだな。

「

不適な笑みを浮かべる美希。

嵐の予感。

所変わつて、探偵団の3人組は。

「君達、不審者だね？」

「「「キヤアアアーーーーーーーー」」

警備の人間に捕まつていたりする。

## 衝撃の再会（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

新一とハヤテが再会していたころ。探検と言つて独断行動した探偵団3人組は、黒服の警備員（？）に捕まっていた。

「君達、不審者だね？」

突然、数人のサングラスをかけた黒服、強面の男たちに囲まれて、3人は怖気づいてしまった。

（えー！何この人たち。もしかしてヤザ？）

（これはすごい！と思ひますよ。このままじや僕達知らない国に売られちゃいますよ）

（俺たちどうなるんだ？）

上から順に歩、光彦、元太の心の中の声を表した物であるが、とりあえず3人とも、この謎の黒服集団を クザと判断したらしく。

そして、ほんの数十秒遅れで哀も追いついたが。

（ええと、この状況はどうやら不味いことだけは確かなようね。）

冷静に状況を分析はしたが、どうやって抜け出すかまでは直ぐに思い浮かばなかつた。

「取り敢えず、事務所まで来てもらひおつか？」

警備員は探偵団を連行しようとする。

「「「！」」」

3人とも恐怖のあまり声になつていない。

探偵団ピンチ！－のまさにその時、偶然1人の男性が声をかけてきた。

「どうかしました？」

全員の顔が声のした方に向けられた。

「あ、これは薫先生。」

警備員の1人が声を上げた。そこにいたのは、白皇学院の教師の薫京ノ介だつた。

「いや実は不審な子供たちを見つけまして。」

「子供に不審も何もないと思いますが。おおかた学校見学かなんかで親とはぐれただけで  
しう。ここは私が預かりますので、皆さんは警備の仕事へ戻つて  
ください。」

「わかりました。薫先生がそう言われるなら。」

そして男たちは去つていった。「今度は不審者として雪路を見張ろ。」といふ話をしながら。それを聞いて薫は苦笑したが、すぐに探偵団の方へ顔を向ける。

「で、君たちは一体どうしたのかな?」

「ええと、そ、その僕たちは。」

光彦が喋りだしたが、興奮から冷め切つていないのか呂律が回つていい。それを見かねたのか、哀が前に出る。

「もういいわ円谷君。私が説明するわ。私達は今日練習試合に来た帝丹高校剣道部の応援として付いてきました。けど途中で逸れてしましました。」

探偵団の名誉を守るためでもなかろうが、哀は原因を省いて今の状況を説明した。

「なるほどね。しかし、剣道部となると剣道場か。あそこは離れた場所にあるからな。ちよつと送るとなると面倒だな。よし、向こうに連絡するから、君たちちはちよつとついて来

い。」

そして4人は校舎の中にある教室の1つに案内された。

「今から誰か暇な奴連れてきて剣道場まで案内させるから、それまでここで待っていてくれ

れ。あと、暇だらうから「これでもやつていな。」

薫は薄っぺらな冊子を机の上に放ると出て行ってしまった。

冊子には、白皇学院編入生試験問題、小学校一年生用と書かれていた。

「とりあえずこれでもやつて時間潰しましょ。」

袞の提案によつて、探偵団一行は問題に取り組み始めた。

10数分後。薫は1人の女性教師を引きつれやつて來た。

「何で私がそんなことを…！」

「文句言つな。後でビール1本奢るから。」

渋る女性の表情が、ビールといつ一言で途端に明るくなつた。

「やりますーやりますー！」

「ハハハ・・・・・・」

そんな女教師に呆れかえるながら、田的の教室に着いてドアを開けた。

しかし、田に飛び込んできたのは、真っ白になり、まるで魂が抜けたかのようになつている少年少女の姿であった。

「おい！何があつたんだ！？」

薰の言葉に、唯一無事だつた哀が話す。

「頭使いすぎてオーバーヒートしたみたいです。」

こうして、薰は女教師にさらばビール1本を追加して、魂が抜けた3人を保健室へ運ぶよう頼むこととなる。

ちなみに、哀は問題を全問正解していたのは言つまでもない。

## 教師と探偵団（後書き）

評価・意見・感想お待ちしています。

## 試合開始！？

新一たち一行は、ハヤテに案内され剣道場までやって来た。

「着きました。」「が剣道場です。」

「それにしても広い学校やな。まさか路面電車で移動するとは思わんかったで。」

「新一たちはここまで移動していくのに、路面電車を使つたが、そのことに平次が驚きの声を上げた。

白皇学院はとにかく広い。森や崖、さらに何故あるかわからないが採石場まである。そのため、生徒や教員の移動用に路面電車が敷かれている。

「僕も最初は驚きましたよ。で、中へお入りください。」

ハヤテに案内され一行は中へ入る。

中で彼等をまつていたのは、ハヤテと同じく防具をつけたヒナギクと、ハヤテの応援のためにやつて来ていたナギの一人だけであった。

「あれ、他の部員の方は？」

他にもたくさんの中学生がいると思つていただけに、予想外の光景に、瑛祐が疑問を口に

した。それに対し、ヒナギクが答えた。

「すいめせん。今日は訳あつて他の部員は欠席なんです。ですから、  
私と彼、綾崎ハヤテ  
君の2人でお相手します。あ、私は剣道部部長の桂ヒナギクです。  
よろしく。」

「あ、帝丹高校剣道部の本堂瑛祐です。こちらも訳あつて今回は僕  
と、こちらの服部平次  
君の2人だけですが、よろしくお願ひします。」

瑛祐の言葉に、今度はヒナギクが驚いた表情をする。

「えーー！だつてーー！」

どうやら彼女は新一や蘭たちも剣道部の部員と思つたらしい。

「いや、実は他の人は応援なんです。だから、試合をするのは僕達  
2人だけです。」

「ええーー！」

まさかどちらも事情により、相手チームが2人だけしか参加して  
いなかつたのは想定外  
の事態である。そしてその想定外の事態は、練習試合さえも飲み込  
んでいく事となるが、  
全員そんなこと予想できるはずが無かつた。

「まあとにかく試合の準備を始めましょうか？」

「え、ええ。」

なんとなくぎこちない状況ではあるが、お互に試合の準備を始める。

瑛祐と平次の2人は更衣室へ行つて着替えをしてくる。

一方、新一と蘭の2人は改めてハヤテ、ナギと顔をあわせる。

「半年振りですね。」

「おお、ちゃんと元の体に戻れたのだな。」

「おかげさまでね。」

「ハヤテ君もナギちゃんも元気そうね。」

そんな他愛もない会話をする4人。

上から順にハヤテ、ナギ、新一、蘭のセリフである。半年前、お互いたつた一度しか顔を会わせなかつたが、それでも忘れることなど出来るはずがなかつた。それだけ強烈かつ、思い出深い出来事だったのだ。

一方、1人仲間はずれ状態の和葉は同じく一人だけになつていたヒナギクに声をかける。

「ヒナギクさんやつけ？道着似合つてんね。」

「あ、ありがとうございます。あなたは？」

「今回応援に来た遠山和葉や、よんじゅ。」

גַּם־בְּנֵי־עַמּוֹתָיו בְּנֵי־עַמּוֹתָיו

そんな平和な光景が繰り広げられていたころ、平和でない事態も同時進行していたりする。

突然、学院内に少女たちの悲鳴が響き渡った。そしてこれが、再び彼らを事件へと導く導火線となつた。

## 試合開始！？（後書き）

評価・御意見・御感想。それにこんなキャラ出して欲しいといつ  
意見も受け付けています。

# 消失3人娘！！

# 木靈する少女の悲鳴。

何だ！？

すぐに新一反応した。もちろん、同じ探偵である平次や何度も事件に関わってきた蘭たちも同じである。

一方、違う反応を示した者もいた。

「なあハヤテ、今のつて？」

はい、瀬川さんに朝風ちゃん、花菱さんの声でした。

この一人は體を覺たのある声だけはそれを言つた

え？ 美希たちは何かあつたのかしら？」

「とにかく行かみゆうーー」

新一を先頭に、全員が剣道場を出て、声がしたほりに走った。

「なんやこれ？」

平次がその異様な光景に呟く。

その煙に、不用意に瑛祐が近づいてしまった。

バタン！――という音と共に彼が倒れこんだ。

「本堂！――」

新一は鼻にハンカチを当てて、瑛祐に近づいた。

幸い、彼になんともないのがすぐにわかった。彼が寝息を立てているのに気付いたからだ。どうやら煙は催眠ガスらしい。

「みんな気をつける、こいつは催眠ガスだ！――」

その言葉に、蘭たちが慌てて煙から離れる。

「こりやあガスが晴れんどうじにもならんな。」

平次がそう言つたが、それは希有だった。風邪が出てきてしまにガスは晴れた。

ガスが晴れたその場所には、悲鳴を上げたと思われる少女たちの姿はなかつた。しかし、何かが落ちているのが直ぐにわかつた。

最初にそれに近づいたのはハヤテであった。それに見覚えがあつたからだ。

「これ！朝風さんのマイクですよ！――」

ハヤテが以前、彼女の家まで届けたのだから見間違えるはずがない。それは朝風理沙愛用のマイクであった。

「「」うちには美希のカメラよ！！」

ヒナギクが落ちていたカメラを拾い上げる。

一方、新一たちもある物を見つけた。

「こいつは？」

新一が拾い上げたそれは、黒いボールのような物で、穴があいていた。

「どうやらそれにガスが仕込んであつたみたいやな。」

さらに、泉の物と思われる携帯も見つかつたが、彼女たちの姿は忽然と消えていた。

「ねえ新一、ここにいた娘たちはどこに行つちゃったの？」

「なあ平次、これつて？」

蘭と和葉の疑問に、二人は確信を持つて答える。

「状況から考えると・・・」

「「」いやあ間違いなく・・・」

「「誘拐だ！！」」

一人の言葉がはある。

一方、その言葉に対しハヤテ、ナギ、ヒナギクはといふと。

「あの3人ですか。」

「まあ、誘拐される可能性は十分にありえるな。」

「まさか、この白皇学院内で犯罪を許すなんて、悔しい！！」

驚きとか心配の声は上げず、ハヤテとナギはまるで起きるのが当たり前のよう、そしてヒナギクは悔しその声を上げていた。

消失3人娘！！（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 静寂の刻

さて、生徒会3人娘に一体何があつたのか？

約10分前

「ヒナちゃんとハヤ太君が2人だけで別の学校の剣道と戦うんだよね？」

泉が美希に問う。

「確かにそう。けど、ハヤ太くんをヒナと一人きりにすることなど、あのお嬢様が許すはずがない。絶対ついてくるに決まっている。」

美希が断言した。

「動画研究部にとつて、おもしろそうな映像が撮れる絶好の機会だな。」

なにやら企んでいるような理沙も、美希に同情する。

いつもどおりの3人組であつたが、それを密かに見ている2人の人間がいることに、3人は全く気付いていなかつた。

「鴨がねぎ背負つてやつてきたぜ。」

「政治家の娘に、大手電気会社の御令嬢。絶好の獲物だな。やるぞ！…」

「おう！…」

そしてその二人組みは、ボール大の物体を、物影から3人めがけ投げつけた。

「「「！？？」」

3人が気付いたときには、もはや手遅れであった。

その物体は盛大に白煙を吹き出した。

「「「キャアアアアー！」」

3人は驚いて叫んだが、このうち美希と理沙はもうに煙を吸つてしまい瞬時に倒れた。

「美希ちゃん！？理沙ちゃん！？」

残った泉が一人に近寄ろうとしたが、彼女も直ぐに煙を吸つてしまつて倒れてしまい、生徒会三人娘はものの一分で全滅してしまった。

3人が倒れると、すぐに先ほどの二人組みが3人に近寄った。

「成功だな！！」

「ああ。さあ、お楽しみの始まりだ。」

一人組みは手早く3人組を連れ去り、いち早く現場を離脱していった。

これが3人娘消失の真相である。

さて、3人娘が誘拐された可能性が出てきたことで、いち早く行動を起こしたのは生徒会長であるヒナギクであった。

「生徒が誘拐された可能性がある以上、生徒会長として黙つておけないわ。すまないけど、試合はお預けね。」

彼女は試合の中止を通告する。

「まあ、こんな時に剣道やつとる余裕なんてあらへんからな。」

中止を言い渡されても、平次は元気であった。いや、探偵としての血が騒いでいるのが原因だろう。

「とにかく、警察に連絡をしねえとな。」

新一はポケットから携帯電話を取り出した。だが、開いたところでの表情が怪訝な物になる。

「圈外！？」

携帯は圈外であった。

「私のも。」

蘭の携帯も圈外表示が出ていた。それどころか、全員の携帯がだめになつていた。

「一体どうなつていいんだ！？」

山奥や離島ならともかく、東京の真ん中でそんなことありえないはずである。

「これは一端職員室に行つて先生に報告して電話を借りるしかありませんね。」

結局、ハヤテの提案が一番妥当な物であった。

「じゃあ私はここで待つわ。瑛祐君を一人にするわけにはいかないわ。」

瑛祐は先ほど誤つて催眠ガスを吸つたため、未だに眠りこけている。

「そうだな。よし、職員室には俺とハヤテ君、ヒナギクさん、それにナギさんとで行こう。蘭、それに和葉ちゃんは悪いけど本堂を頼む。」

「うして、一手にわかつての行動となつた。新一が職員室に行く

面々の構成をこうしたのは、地理に詳しことと思つたからだ。そして、これが後々重要な要素となる。

さて、職員室に向かつた一行は何事もなく職員室についた。

いや、白皇の生徒である3人はそれに薄々感じていた。

「ねえ、お嬢様にヒナギクさ。何か変じやないですか？」

「確かだ。」

ナギがハヤテの問いに同調する。

「休日とはいえ、部活動や休日授業で結構生徒がいるはずなのに・・・

・・・静か過ぎる。」

学院内は不気味なほどの静寂に包まれていた。そして、彼らは思ひもよらない光景を目にすることとなる。

## 静寂の刻（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

緊迫――

新一・ハヤテを中心とするグループは、職員室までやつて來た。

「失礼します。」

扉を開けたのはヒナギクであるが、そこで全員が予想外の光景を目にする。

「「な――」」（新一・平次）

「嘘――」（ヒナギク）

「ハヤテ、一体これは？」

「僕にもわかりません。」

職員室には職員どころか、人っ子一人いなかつた。つまり完全に無人となっていた。

「どうやら何か起きたようやな。」

「ああ、服部の言つとおりだ。」

新一と平次の二人が職員室を見回しながら言つ。

「何かつて、何よ――？」

ヒナギクには訳がわからない。それに対し、やれやれといった顔

で平次が説明を始める。

「初步的なことや。まず・・・・・」

「室内に飲みかけの飲み物や、立ち上がったままのパソコンがあること。椅子が出たままになつていてること。そして床に書類が散乱している箇所があること。それから考へると、仕事をしている最中に、職員が突然全員移動する、または移動させられる事態が起きた。でしょ。」

平次を遮り、やう答えたのはなんとハヤテである。

「「「な！」「」」

新一に平次、ヒナギクも驚き顔だ。

「ハヤテ！お前、なんでそんな？」

「いえ、何年か前に、年偽つて探偵の仕事を手伝つていきましたから。

」

ナギの質問に、ハヤテがせらりと答える。

「それはともかく、職員室から先生が全員消えるなんて！？先生たち自身が出てくなんてありえませんし。」

その間に、ヒナギクも同調する。

「ハヤテ君の言つとおりよ。最低でも一人は居残るはずだわ。職員室を空にするなんてありえないわ。」

そのセリフが、5人を、なんともいえない不安感が包む。

「とにかく、これは異常事態よ。」

「桂さんの言うとおりです、直ぐに警察に連絡を。」

新一が警察への通報を促す。だが、ヒナギクにはまだ確認するべき人物がいた。

「私は念のため葛葉理事長に連絡をするわ。」

葛葉理事長というのは、この白皇学院理事長の葛葉キリカのことだ。彼女は、まるで忍乱郎に出てくる園長のように、突然思いつきのアイディアを生徒や教師に押し付ける厄介な人物で知られている。

ハヤテも先日女装学なる物を作られて大いに迷惑した。

閑話休題。とにかく、新一とヒナギクの二人は近くの電話の受話器を取る。しかし、すぐに二人の表情が変わる。

「どうしたんや工藤？」

「うんとも、すんとも言わない。回線を切られてるみてえだ。」

「なんやつてー?」

「うわあちひよ。」

ヒナギクの電話も状況は同じであった。

「ハヤテ。携帯もだめ。電話もだめ。これってもしかして……」

「はい、完全に僕たちは、いえ白皇学院は孤立したようです。」

もはや3人娘どころではなかつた。学院全体で何がが起きている。

と、その時。机の上の電話が鳴つた。

「電話ーー？」

5人は突然の電話に沈黙する。職員室内には、ただ電話の鳴る音だけが響く。しかし、ついにヒナギクが意を決して受話器を取つた。

「もしもし。」

**緊迫――（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

突然鳴り出した電話。ヒナギクがそれを取る。と、同時に会話の内容が他の5人にも聞こえるようにする。その電話にはそういう機能が偶然にもあった。

「もしもし?」

「やはりまだいましたか。」

相手の第一声はそれであつた。その声は電子的な音、まるでドリマなどで聞く変声機を通したような音であつた。

「あなたは一体誰?」

「やうですな。便宜的に「ヒナギク」とでも呼んでもらいましょうか。」

「ヒと名乗ったその人物。

「ではヒさん。今学院内で起じている異常事態はあなたのせいなの?」

「やうです。我々がやつました。といよりも、現在白皇学院は我々の制圧下にあります。もちろん、あなた方以外の全ての教員教師もね。」

その会話に、早速新一たちが食いつく。

「我々って言つてゐるな。」

「ひちゅうじ」とは、複数犯つてことやな。」

その間にもヒナギクと丁との会話は続く。

「一体何が目的なの?」

「そうですね。金もあります。それに・・・・・いや、他の理由についてでは後ほどお教えしますよ。取りあえず、今我々が要求するのは理事長との交渉です。我々が理事長室に踏み込んだときには、彼女は既にいなかつた。まずはあなた方に彼女を見つけていただきたい。交渉はそれからです。なお、外に助けを求めても無駄ですよ。携帯の電波は妨害しております、また電話回線も我々の手中にある。S Pは既に始末しましたし、門も全て閉鎖しました。ですからあなた自身でがんばってください。なお、刻限は一時間以内です。もし遅れたら、人質に危害が及ぶことを警告します。なお、連絡手段は時計塔の生徒会室の電話回線を一時的に繋いで起きますのでそれを使ってください。以上です。」

そこでブツツリ、電話は切られてしまつた。

ヒナギクは受話器を置き、4人の方を向く。

「状況から考えて相手の言つてることとは間違つていなにようですね。」

ハヤテが言つ。

「しかも、ここをじりじり観察してゐみたいだし。」

その新一のセリフに、ナギが反応した。

「どうしてそんなことわかるのだ？」

「さつき、一の奴はあなた方つて複数形使つたやろ。電話だけやとわからん」とまでわかつとる。」

平次の言葉をさりにハヤテが引き継ぐ。

「最低でも、ここに来るまでか、それともこの部屋の中で見張られていたことになりますね。そうなると、不用意に外との連絡を試みる」とは出来ませんね。」

「とにかく理事長を見つけ出さないと……。」

それには全員が頷く。

「それと、剣道場に残してきた連中にも知らせないといけないんじやないか？」

このナギの言葉に4人は蘭たちのことを思つ出した。

「そうだった。蘭たちにも伝えねえとな。」

「けど、誰が行くんです？」

ただでさえ、広い学院内である。そこから理事長を見つけなければいけないのに、ここで人を割くのはまずい。かと言つて知らせに

いかないのもまざい。

5人は考え込んだ。と、そこへ。

「あ、君たち無事だつたんだ？」

ドアのほうから女性の声がした。

## 接觸（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。なお、作者の都合により今後は更新スペースがダウンすると思います。すいません。

そこに現れたのは。

「…………理事長…………」

理事長の萬葉キリカだった。

「一体どこのいたんですか？」

ヒナギクが声を上げる。

「いやね、今日は私の執事が実家の都合でいないから暇しててね。ちょっと気分転換に散歩してたら、変な連中が走り回ってた。だから、草むらに隠れたりしながら」「ここまで来たんだけど。」

なんとも運の良い理事長である。

「理事長、実は…………」

ヒナギクは先ほどの電話の内容を話した。

「なるほどね。ここに警備網を突破するとは中々やるじやないか。」「

「関心している場合じやないでしょ 理事長。」

犯人連中に感心する理事長は、ハヤテは少しばかりいらだつ。

「ハヤテ君の言つとおりです。とにかく理事長には時計塔まで行つ

てもらわないと。ちやんと来てくれますよね？」

ヒナギクが念を押す。まあ来てくれないとか言つたら、普通に人間失格である。

「あたりまえだろヒナギクさん。私だって理事長としての責任というものがある。・・・・・・・・・・・・  
それに、ここで田皇学院に何かあつたら生徒たちへの嫌がらせも出来なくなるし。」

最後の本音（？）はボソッと言つたが。

「今何か言いました？理事長！？」

ヒナギクはしつかり聞いていた。（ただし内容まではわからなかつたが。）

「いいえ！何にも言つてませんよ！――！」

そんなことを言つキリカに、胡散臭そうな目を向けるヒナギク、  
ハヤテ、ナギ。

その様子を訳がわからず見つめる新一と平次。

「あの、取り敢えず今後どうするか決めたいんですけど？」

たまりかねて新一が言つ。

「あ、ごめんなさい。」

ヒナギクがそれに対し、謝った。

「とにかく、そちらの理事長さんには生徒会室に言って犯人との交渉を行つて頂きましょう。ヒナギクさんには護衛をお願いします。」

「わかりました。」

新一の提案に賛成するヒナギク。

「私とハヤテはどうすればいい？」

ナギが質問する。

「ナギさんとハヤテ君はそうですね……取り敢えずハヤテ君は俺と一緒に外との通信手段がないか探してください。ナギさんは服部と一緒にまず蘭たちと合流してください。合流したら、そのままヒナギクさんの所へ向かってください。」

「ちょっと待つて下さい。僕は執事としてお嬢様をお守りする義務があります！」

ハヤテが反対意見を唱えた。しかし。

「いやハヤテ。私は大丈夫だ。お前は色々知っているから外との連絡を試みたほうが役に立つ。私のことなら心配するな。」

「お嬢様……わかった。服部君、お嬢様をお願いします。」

「おお、任しちゃ。」

こうして、それぞれ次にやるべきことが決まった。

そんな中、葛葉がこんなことを話した。

「それにしても、犯人連中は一体どうやって警備網を突破したんだ？」

その意味深げな言葉に、全員が興味を示した。

「それはどういふことですか？」

「UJの学校は知つてのとおりSPが常に警備しているが、万が一に不審者の侵入に備えてADS（auto defense system）という内部警備システムがあるんだ。これは内部に侵入した不審者に反応して外の警備会社や内部のSPに警報を鳴らすシステムになっている。もちろん学院内にも警報が鳴る。コンピュータによる24時間の管理システムなんだが、それが動かなかつたなんて。」

「外部からハッキングされたとか？」

ハヤテが言うが、葛葉は首を振つた。

「いや、完全独立型から外からの進入は不可能だ。これを止めるには、学院内のマスタースイッチを止める以外に方法はない。それも、私が教官室のマスタースイッチのボックスを専用キーを使って開けなければならない。」

これが、事件を解決する鍵になると、その時は誰も考えていない

かつた。

とにかく、新一やハヤテたちはそれぞれ行動を開始した。

## 行動開始（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

# 3人娘の行方

職員室で平次やナギたちとわかれた新一とハヤテのコンビは、外との連絡を試みる。

「しかし、携帯もだめ、電話もだめ、無線機もだめの状況でどうしたものか。」

試みるとは言つたが、方法が中々見つからない。ちなみに、無線機というのはコナン時代から持つてゐる探偵団バッジだが、これも使用不能だつた。周波数を換えても雑音だけで、発信も受信も出来なかつた。

「他の方法を探すしかないですよ。こういう場合原始的な方法も役に立つかも。」

ハヤテが意見を言う。

「原始的な方法か・・・・・伝書鳩でもいればな。あとは光か音か  
煙つて手もあるけど。」

考え方の方法ははつきり言って不可能か、もしくは具体的な内容が外に伝えられないものばかりだ。

と、そこでハヤテがあることを思い出した。

「そういえば・・・・・来てください。」

「アリス、？」

「行けばわかります。」

半信半疑で新一はハヤテについていく。もちろん、犯人グループがいなか細心の注意を払つて。

ハヤテが向かつた場所とは。

「ここは、物理室？」

なんと物理室だった。いや、厳密には違つた。ハヤテが扉を開けたのは機材がしまわれている準備室の方だった。

「ここに何かあるの？」

「はい。こないだ掃除当番で掃除したとき見つけたんですけど。・・・ええと・・・・あつた。」

ハヤテが何やら包みを出した。

それをハヤテは開ける。

「これは、電信機じゃ？」

電信機。つい数年前まで船舶では当たり前のように使つていたモールス信号を発信する機械。モールス信号はトン、ツーというキーの叩き方の組み合わせでアルファベットを作る。

「ずっと昔の教材だつたんでしょうけど、状態が良いですから、多分使えます。これの電波ならなんとかいけるんじゃないでしょうか

？」

新一はしばし考えたが、他に策は無い以上、やつてみるしかない。

「よし、やるわ。」

一人は早速準備に掛かる。準備は簡単だった。元が教材用のおもちゃのやうなものだつたからだ。

「じゃあ打ちます。」

「えー！君つかえるの？」

新一は自分で打つつもりだった。まさか目の前の少年がモールス信号を知っているとは思えなかつたからだ。

「もちろん。遠洋漁船の中で習いました。ちゃんと電信の免許も持つています。」

ありえないといつよつやうな表情で見つめる新一の横で、ハヤテはレシーバーをつける。

「とにかく文面どうします？」

「そうだな。」

新一は手近かな紙に内容を書いた。

「じゃあ頼む。」

ハヤテは紙を一読すると、直ぐにキーを叩き始めた。

「白皇学院。SOS。武装グループ占拠。救援求む。」

文面が短いのは、ハヤテがやりやすいようにといつ配慮だ。これを3回繰り返した。

はたしてこの信号が外に届くかは、まだ一人にはわからなかつた。

さて、一方忘れられかけている生徒会3人娘はどうなつていたのか？

実はこの時ちょうど麻酔が切れ、3人とも起きたところだつた。

「…………」

3人とも起き上がつた瞬間、まるで一日酔いの様に頭がくらくらしていた。しかし、しばらくしてそれも引いていった。

「一体何が起きたんだ？」

「わからないよ理沙ちん。」

「取り敢えず、何者かに襲われて監禁されているようだ。」

美希が冷静に言った。

「「え……」」

美希の言葉に、一人とも自分たちの様子を確認してみる。なるほど、口こそ塞がれていないうが、手足は完全に縛られていて身動きは取れない。辺りは薄暗いが、取り敢えずドアがあり、カーテンが閉められているが窓があるから、どこかの部屋の中のようだ。

「これでは全く状況がつかめないな。」

理沙が呟いたとき、ドアが開いた。

「お田覚めのようですね、お嬢さん方。」

一人の人間が入ってきた。顔にはマスクをしていどんな顔かは全くわからないが、声と外見からして男だ。

「あんたがこんなことをしたのか？私たちを誘拐してどうする気だ？」

男に美希が食つて掛けた。

「別に。他の教師や教員と同じく拉致する必要があったから拉致しました。なお、あなた方が反動的な態度を取つたり、反抗しきえしなければ、身の安全は保障しまじょう。」

「他のつて、私たち以外にも捕まっている人がいるの？」

泉が男のセリフから読みとつた疑問を口にした。

「ええ。もつとも、先ほど2名ばかり、逃げようとしたのでやむな

く処分しましたが。」

その言葉に、3人の背筋を冷たいものが走る。

「処分つて、あんた人の命をなんだと？」

美希のその言葉に、男は答えなかつた。

「警告はしました。花菱美希さん、瀬川泉さん、朝風理沙さん。あなたがたが賢明であることをいのりますよ。長生きしたいのなら、我々に敵対しないことです。」

男はそう言い残して出て行つた。

しばしの沈黙。

「どうしよう? 美希ちゃん、理沙ちゃん?」

「私たちの名前をフルネームで答えていたから、私たちの身元などを把握すみだらうな。果たしてこのまま連中が何もしないだらうか? しかも、さつきの言い方からして「冗談とも思えない。」

美希が冷静に状況分析をする。

「しかも、平氣で人を殺した連中だ。あんなこと言つたが、最後は口封じに殺されるかも。」

理沙が意見を付け加える。

「そ、そんな……」

泉はすでに泣きそうである。

「私たち殺されちゃうのーー？」

「とにかく、脱出したまゝが良さそうだな。じゃないとマジで泉の言つたとおりになりそう。けど、方法が無い。」

理沙がそう言つたのに對し、美希が不敵に笑つた。

「ふふふ。方法ならあるわ。」

「「えーー?」」

一体彼女にどんな秘策があるのだらうと、一人とも本氣で考えてしまつのであった。

### 3人娘の行方（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 希望へ向けて

新一とハヤテが命がけで打つた救援の信号は、外に届いていた。

犯人たちの仕掛けた電波妨害も、電信の周波数は想定していなかつたらしい。

しかし、やはりおもちゃのよつた電信機では電波が届く範囲は小さかった。おまけときて、今となつては電信はほとんど使われない。つまり受信する側が殆どいなかつた。

信号を受信したのはほとんどが軍事系の施設だった。

在日米軍の横田基地や、航空自衛隊の入間基地。海上自衛隊の横須賀基地や所属艦艇等がこの電波を捕らえた。

しかし、まず米軍は自分たちに関係なかつたからか、黙殺した。また、各自衛隊基地の反応も鈍かつた。そりや、用意に信じがたい内容であるから仕方ない。

一番素早く動いたのは、白皇学院に一番近い場所にあつた陸上自衛隊練馬駐屯地の部隊だった。

ICOの部隊は、有事の際は都営大江戸線で都心部に進出することとで、演習の際は話題になつた部隊だが、白皇学院から3kmと離れていないところに駐屯地があつた。また対テロマーケアルでも、要警備施設に指定していた。

最初この部隊の通信兵も、内容に半信半疑であつたが、万が一と

「うー」と上官に知らせている。

そして、検討後自衛隊が警察に通報したのは受信後1時間たつてからであつた。そして、重大事態とわかり、捜査一課が動き出すのはさらに30分後であつた。

さて、新一とハヤテから別れた他のグループはどうしたであろうか？

まず、平次とナギの二人は、無事に剣道場に辿り着き蘭たちと合流し、今度はヒナギクたちと合流すべく、時計塔に向かつた。ちなみに、瑛祐もこの時には麻酔から覚めている。

そして、一方のヒナギクと葛葉理事長も、何事もなく時計塔に着いた。ところが、予期せぬことに、エレベーターで最上階の生徒会室に赴くと、ある一人の顔見知りである人物と出会った。

。 その2人は、 ヒナギクと葛葉が現れたのを見て、 驚きの表情をし

「「会長に理事長！」「

大物が一人揃つてやつてきたのだから、その驚きも尋常ではない。

一方で、ヒナギクも驚いた。まさかまだ生徒が残っているとは思わなかつたからだ。

「何で一人ともまだ残つてゐるの？」

さて、この一人とは一体？

所変わつて、生徒会三人娘はと「うと？」

「美希、何か逃げられる手段があるのか？」

理沙が怪訝な表情で聞く。確かに美希は抜け目ない娘ではあるが、この状況を打破できるとまでは、理沙も考えられなかつた。そしてそれは泉も同じで、彼女も同じような表情をしている。

「理沙、なんとか私の右足の靴に手をやれる？」

美希の突然の提案に面食らつ理沙。もちろん、見てる泉も同様だ。

「えー？ 美希ちゃん一体何言つてゐるのー？」

「出来なくは無いけど、そんなことしてどうすんの？」

「いいから。やつて。靴をとつて私の手に渡して。」

「わかった。」

手首と足首に繩が結ばれていたが、なんとか体を動かすぐらいは出来るし、指も動かせる。

理沙はなんとか体を動かし、言われたとおり美希の右足の靴をとり、美希の手に渡した。

意外と簡単のようだが、実際は何度も落としたり、手にとり損ねたりしている。

美希は靴を持つと、しばらく手を動かす。

「 「？」」

二人には彼女の動作の意味が全くつかめなかつた。

5分後。

「よし。」

美希がそう言つた途端、靴底が外れ、何かが出た。

「 「え……」」

美希はそれを掴むと、再び手を動かす。すると、その物体が一つに開き、ナイフの刃が出た。折りたたみ式の小型ナイフだ。

「「「ひーー。」」

一人とも驚くほか無い。まあ田の前の少女がスパイのよつた行動を取れば誰でも驚くだろ。

それにかまわず、美希はナイフを器用に動かし、あつとこつ間に手足の縄を切つてしまつた。

美希は手足が自由になると、一人の縄を解きはじめた。それから5分後には、一人も手足が自由になつた。

「や、逃げるわよ。」

「うん。けどや、美希。なんで靴底に隠しナイフなんて仕込んでるの?」

理沙が恐る恐る聞いた。

「え、これは護身用だけど。いつ命を狙われるかわからないから、用心に越したことは無いでしょ? 何せ政治家の家系だから。」

（（あんた（美希ちゃん）の家系って一体?））

と心の中で思ひ理沙と県だった。

## 希望へ向けて（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、自衛隊が練馬にいるのは本当です。

## 要求

ヒナギクたちが生徒会室で会った人物。それは、生徒会役員の春風千桜と霞愛歌であった。

「ハルに愛歌。あなたたち何やつているの? こんな時に! -! -

この非常時にどうして平然としていられるのか、ヒナギクにはまったく理解できなかつた。ところが、ヒナギクの言葉に、逆に二人が怪訝な顔をした。

「こんな時つて?」 b yハル

「何かあつたんですか?」 b y愛歌

2人のこの緊張感が微塵も感じられない言葉に、ヒナギクも葛葉も呆気に取られてしまった。

「あなたたち、全然気付いていなかつたの? こんな大変な事が起きたことに。」

「大変な事! -?」

本当にわからないようなので、ヒナギクが事情を説明してやる。

聞き終わると、もちろん一人とも大いに驚いていた。まあこれで驚かなかつたら人としてどうかしているかもしねい。

「全然きづかなかつた。」

二人の回答である。

「ははは・・・」

苦笑するヒナギク。一人が無事だったことに安堵して良いのか、それとも全く気付いていなかつた事を怒るべきなのか、ヒナギクの心の中は複雑であった。

そんなヒナギクの横の葛葉理事長が言つ。

「まあ、とにかく私はここで犯人と交渉する。桂会長、約束の時間まであと何分かな?」

葛葉に言われ、腕時計を見るヒナギク。

「あと20分です。」

ヒナギクたちにとつて、最も長い20分であった。

一方、蘭達と合流した平次とナギは、今度はヒナギクに合流すべく時計塔へと向かつて移動していた。

「なあ平次、ほんまにこの学校が占拠されとるの?」

まだ信じられない和葉が平次に訊ねる。まあ自分たちが身動きで

きていればそつも思つだらう。

「ほんまみたいや、電話は一切通じとらんし、教師も生徒も入っ子一人残さず消え取るからな。だから回りにしつかり注意するんや。いつどこから襲つてくるかわからへんで。」

平次が警戒するよつに促す。

「けど犯人たちはそこまでして何がしたいんじょ、うね？」

今度は瑛祐が疑問を口にする。

「ああな。そこまではわからへん。」

さすがにそれは犯人に聞いてみないとわからない。

「ナギちゃんは何か思つたる事はないの？」

蘭がナギに聞いてみる。

「さあ。ただこの学院、結構いろんなところから恨みを貯つてゐるからな。何が起きても不思議でないとは言える。」

「そりやじつこいつ」とやへ。

ナギの言葉に対し、平次が聞く。

「この学校は以前から独自の教育方針を取つてゐる。私が飛び級制度で入れたのもそのおかげだ。反面、そう言つた革新的な教育方針に異論を唱える連中も、学院内外に多いらしい。それに加えて、生

徒の安全をあまり考慮しない行事（マラソンや臨海学校）や理事長のワンマン経営も以前から反発が強い。恨みならぬ中から買つてこると思つだ。

ナギが説明する。

「じゃあ今回の事件もそつこつ連中が？」

「可能性としてはあり得る。まあ、金田荘での犯行なら直ぐに解決するだろうがな。なにせこの学校の財力は半端じゃないからな。身代金ぐらい直ぐに払つてお終いにするかもしだれん。もつとも、今までそんなことに成功した連中はいないがな。SPや厳重なセキュリティーにはままれてしまつのが落ちだ。」

その言葉に、平次はある考えを持った。

「さうなると、犯人の狙いは金じゃない何かにあるんかもしだれんな。

その言葉に、他のメンバーが「え……」とする。

「

「だつてさうや。身代金なら、わざわざいこまでする必要ないやる。別の場所狙つたほうが簡単や。それに、交渉で別に理事長に直接言わんでもええや。もしかしたら犯人が要求するのは、金なんかやなくて、理事長がいなきや出来んこととかやつんか？」

実際、平次の言葉は現実のものとなる。

20分後、時計塔生徒会室。

約束の時刻ピッタリに、生徒会長席の電話が鳴り始めた。

4人に緊張が走る。

葛葉が慎重に受話器を取る。

「もしもし?」

「葛葉理事長ですか?お話できて光榮です。私は一と申する者です。」

受話器から変声機で変えたような声が響いてきた。

「单刀直入に聞こう。要求はなんだ?金か?」

葛葉が確信をつく。

「要求は唯一つです。身代金などは必要ありません。我々があなたにしていたきたいのこと。それは・・・白皇学院の即時解散です。」

## 要求（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

「白皇学院の解散だと……」

予想していなかつた要求にさすがの葛葉も、そして側で電話を聞いていた3人も絶句した。

だが、沈黙している余裕は無い。直ぐに葛葉は言葉を見つけ話しだした。

「それは、つまり白皇学院を解散しろと言ひつけとか？」

「さう解釈していただければわかりやすいでしょう。」

全く変わらぬ口調の一。それが、葛葉の心を混乱させる。

「な、なんで？なぜそんなことを要求するんだ？」

なんとか言葉をつぐむが、その声には焦りのよつた震えが含まれていた。

「その理由については申し上げるまでもない。じだけお答えしましょ。さあ、要求を飲むか飲まないか？イエスかノーか？」

犯人が強硬に返答を求めてくる。

もちろん、すぐにイエスかノーかなどと答えるはずが無い。それに葛葉はなんであつた理事長である。理不尽な要求を受け入れる筈が無い。

なんとか心を落ち着かせる。

「すぐには返答できない。検討させて欲しい。」

時間稼ぎにである。

「ふむ。時間稼ぎというわけですね。いいでしょ、あなたがたがどれほどまでにがんばれるか見せてもらいましょう。もつとも、こちらとて永久には待てません。返答期限は12時間以内。それより1時間でも遅れれば、人質を一人ずつ殺します。また、24時間経つても得られなければ、白皇学院全体を爆破する。」

Tは恐ろしい言葉を吐いた。

「信じられませんか？ではこいつしましょう。」

Tがそつと言つた直後。

ドーン――

何かが爆発するような音。千桜と愛歌が窓に詰め寄る。

彼女らが見たのは、派手に炎と煙を上げる路面電車の姿だった。

「電車が爆破されました――」

「人が同時に叫んだ。

「・・・・・」

葛葉は受話器を握り締めたまま声が出なかつた。

「これではつたりではないことがわかつたはず。では良い返事をお待ちしていますよ葛葉理事長。6時間後に同じ電話に出て下さい。」

そこで、電話はブツツリと切れた。

しばらく、4人は呆然として立つたままであつた。

4人を恐怖させた爆発。しかし、影響は4人だけではなかつた。実は悪い事に、平次達が直ぐ近くで歩いていたときに爆発したのだ。

「クソ！爆弾か？皆無事か？」

平次がみんなに確認をとる。

「ああ。」「なんとか。」

という返事がナギや蘭、瑛祐から帰つてきた。

しかし、和葉からの返事が無い。

「和葉！？」

平次が彼女がいた方を見てみると、彼女は倒れていた。実は爆心

点に一番近かつたのは彼女だった。

慌てて平次が詰め寄り抱き起しすと、頭と腕から血を流して気絶していた。

「和葉……」

新一達の仲間で初の負傷者であった。

さて、無差別爆弾テロで和葉が負傷してしまった。こゝ。

生徒会3人娘は脱出を図っていた。

縄を切り行動の自由を得ると、彼女らはまず慎重に部屋から出る。

「誰もいない様だな。」

美希が扉の外を見渡して言った。

扉に見張りが立つていなか警戒したが、杞憂で済んだようだ。

「しかし、こゝはどうだ？」

理沙が言つ。

「こゝ、あんまり見覚えないわね。」

美希にも見覚えない場所だつた。しかし、一人泉が気付いた。

「わかつた！ ここ北校舎だ。」

「北校舎？北校舎って確かに旧校舎に並んで古い建物だろう。今は倉庫になつているんじや？」

理沙が思い出したことについてみる。

「そう。けど、私生徒会の手伝いでーーー来たことがあるもん。間違いないよ理沙ちゃん。」

「なるほど。殆ど使われていなーいが、ある程度使える北校舎は監禁場所に打つてつけつてわけね。」

美希が納得する。

「けど美希ちゃん。北校舎は出口からも一番遠いよ。生徒会室と往復するのに1時間かかったよ。」

「げ！一時間！」

理沙が泉の言葉に驚く。

一方で美希は冷静沈着だつた。

「しかし一時間掛かるうが他に手段が無い以上、私たちはやるしか  
ないんだわ。とにかくここから逃げるのよーー！」

「わかつたよ美希ちゃん。」

「まあ他に方法もないし。」

こうして、3人は歩いて脱出する。幸運にも、いた場所は一階だつたため、そのまま廊下の窓から外に出た。

「行くわよーー！」

「おおーー！」

美希をリーダーにして走り出す。しかし、彼女らは気付いていなかつた。窓際にセンサーが仕掛けられ、自分たちの行動が既にばれているのを。

## 非情（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

さて、白皇学院の中で凄まじいバトルが行われている。外でもようやく動きがあった。

新一とハヤテが命がけで打った信号が外に届き、そしてその内容が警察の元まで行っていた。

警察も最初はいたずらの可能性を疑つたが、白皇学院との連絡が取れないことに加えて、警邏中のパトカーから学院内部で爆発らしきものありという報告まであり、事実と認定。加えてテロの可能性も出てきた。

内部からの連絡では、相手が武装しているグループと言つことから、不用意な接近も危険と判断された。内部の状況は殆どわからないう、捜査をする上で非常に困難な状況に立たされた。とりあえず捜査本部が練馬西署に立ち、生徒の安否確認が始まった。それに伴い、捜査一課のいつものメンバーも動く。

「捜査本部の指揮は室井警視正が執る。田暮警部、強行班係からは君を長として行つてもらつ。非常に情報が少ないが、生徒が人質になつてゐる可能性があるから、早期の解決が望ましい。頼むぞ。なお、交渉課やS A Tにも召集が掛かっている程の事件だから気を引き締めてやれ。」

「了解しました。」

田暮は指示をした上官に敬礼をした。

数分後呼集がかかり、田暮は刑事たちに状況を説明した。

「というわけだ。今回は事件の早期解決が求められている。各員の奮闘に期待しているぞ。」

田暮の話が終わると、刑事たちは一斉に出動する。

その中に、高木、佐藤両刑事の姿もあった。

「学校でのテロですか、物騒ですね。」

高木が佐藤に向かって言つた。

「けど情報が殆ど無いなんて。こんな時に工藤君がいてくれたら、少しは知恵を借りれるのに。彼に連絡取れたの？」

「さつきから携帯に掛けているんですが、全く通じません。」

高木が携帯を取り出しながら言つた。

「そう。今回は彼に頼るわけにはいかなそうね。」

佐藤がため息をついた。すぐに高校生探偵に知恵を借りると言つたのは、刑事としてどうかと思うが、それはともかくとして、まさかその新一が白皇学院内にいるとはさすがの二人も予測できなかつた。

とにかく、いつして警察も動き出した。

一方、白皇学院内では脱出した生徒会3人娘が聞きに陥っていた。

「「泉速くーー。」」

「待つてよーー。」

全速で走る3人。その3人を、一人の銃を持つた男たちが追いかけていた。

「止まれーー止まらんと撃つぞーー。」

もちろん、止まれと言われて止まるほど3人は馬鹿ではない。そんなもの無視して、とにかく走る。

「くそーーしつこいなーー。」

美希が悪態をつく。

「美希、このままじゃ追いつかれるのも時間の問題だぞーー。」

理沙が言つ。相手との距離は縮む一方だ。彼女らも体力的に限界がある。

それでも、美希は建物の影に隠れるなどして相手に銃を撃つタイミングを持たせないようにしている。2人も美希の指示に従つて動く。

これに対し、ついに相手もしびれを切らしたようだ。

ついに発砲してきた。

最初はバンバンと単発である。走りながら撃つて いるから そ うそ う当たるものではない。しかし、数秒後には連射に代えて撃つて き た。

ピュンピュンと周りを弾が通過する。連射では、さすがに素早く動いてもよけきれなくなってしまう。

「本邦にゆきりたる。」

美希がそんなことを呟くほど、本当にやばい。

そして、数秒後最悪の事態が起きた。

「ウ！！」

突然泉が倒れこんだ。弾が当たったようだ。

「「泉！！」」

二人が倒れた泉に駆け寄る。  
偶然にも相手は弾切れになつたのか、  
一時的に銃撃が止んだ。

「泉！しつかりするんだ！！」

美希が抱き上げるが、お腹の辺りから鮮血が流れ出ている。

「泉・・・」

そんな泉の口から出たのは意外な一言。

「二人とも・・・私にかまわず逃げて・・・」

純粹な彼女らしい言葉である。そして、それによつて奮い立つた人物がいた。

「よくも泉を！これでも喰らえ！――」

そう叫ぶやいなや、理沙が意外な行動に出た。石を2つ拾い上げ、敵に向かつて投げつけたのだ。

## 光と闇（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。なお、今回はコナン、ハヤテ以外の作品のパロディも混ざっています。ご注意ください。

理沙の投げた二つの石は、30m程離れたところにいた武装犯の顔面に見事直撃した。凄まじく高い命中率である。しかも、威力も生半可ではなかつた。あたつた途端犯人がうめいた。

「「痛……」」

痛みに銃を落とす武装犯。

「今だ！美希逃げるぞ……」

唖然とその光景を見ていた美希は、理沙の言葉によつて我に帰る。

「あ、ああ……」

美希は泉をおぶると、すぐに走り出した。

「理沙！一体さつきの何だ！？」

理沙の予想外の行動に、さすがの美希も驚きを隠さない。

「実は家の家系には昔忍者をしていた人がいてな。先祖代々物を投げるのは昔から得意なんだ！！もつとも、私の場合はさつきの石みたいな小さい物で精一杯。普段この能力を使うことなんて滅多にないけど。」

なるほど。それなら毎年行う体力テストのハンドボール投げで平凡な点数しかとれないのも頷ける。

彼女らは先ほどと同じくとにかく走った。しかし、美希は少女とはいえ人一人おぶつているのだから、すぐに体力の限界がきてしまう。

「理沙、もうだめ！…」

「あきらめるな！…とにかく走らなことあつらに追いつかれるや…！」

だが、角を曲がった時、一人の目の前に最悪の光景が広がる。

「「しまった…！」」

行き止まりであった。そして、どうするか迷っているうちに、痛みから立ち直った武装犯が追いついてきました。

「やつと追い詰めたぜ！…」

「やつは味なマネしてくれたな…！」の礼たつぱりせてもやつせ…！」

一人の武装犯は銃のスライドを引く。そして銃口を3人に向けた。

「3人揃つてあの世行きにしてやる。ジ・エンドだ…！」

「「「…！」」

（「ここまでなのか…）

（私たちここで死ぬのか！？）

二人は覚悟を決める。お互い一瞬目配せした後手を繋ぎ、最後の瞬間に備える。

「覚悟を決めたようだな！安心しろ、心臓をぶち抜いて苦しまずに死なせてやるぜ！！」

だが、彼らは中々引き金を引こうとしない。相手が何も出来ないと見下し、さらに死の恐怖に怯える二人の様子を楽しんでいたのだが、その慢心が命取りとなつた。

どこからともなく飛んできたサッカーボールが一人の頭に直撃した。

「な！？」

もう一人が急いで銃を構えるが、既に手遅れであった。次の瞬間その体が空中に舞い上がつていた。

ハヤテが必殺技の疾風の如くを炸裂させたのである。

「「ハヤ太君！…」」

「皆さん大丈夫ですか？つて、花菱さん、血が出ますよ！…」

ハヤテが美希の服についた血を見て言った。

「これは泉の血だ。私と理沙は大丈夫だ。けど、泉が重傷だ！…」

その言葉に、ハヤテは泉に近寄った。

「お腹に銃弾を受けているようですね。ちょっと失礼。」

ハヤテは泉の体に触れてみる。

「弾は抜けているようですが、出血が激しいです。応急手当が必要です。」

と、そこでサッカーボールをベルトから打ち出した新一が追いついた。

「大丈夫かハヤテ？」

「僕は大丈夫です。けど、瀬川さんが……」

その言葉に、新一も彼女に近づいた。

「止血と消毒だ。」

すると、彼は持っていた救急箱を開けた。

「その救急箱は？」

美希が質問する。

「ああ。職員室に置いてあつたのを持ってきたんだ。」

新一が手早く消毒薬とガーゼを使い応急手当をする。

「これで大丈夫なのか？」

新一に理沙が聞く。

しかし、新一の表情は冴えない。

「一応止血と消毒はしたけど、大分出血しているからな。病院に早く行つて輸血したほうが良いとは思つ。」

確かに、泉の顔は青い。そして服にはべつとりと血が付いている。血まみれといつてよい。

「とにかく一端ここを離れて時計塔へ行きましょう。そこに行けば葛葉理事長にヒナギクさんもいますから。」

ハヤテの提案によつて、5人は時計塔へ向かうこととなつた。

「あ、ちょっと待つてください。」

ハヤテは犯人が落とした銃に近寄つた。そして銃を持ち上げて何かを始めた。

「何やつてるんだ? ハヤテ?」

新一が疑問を口にする。

「ああ。銃のボルトを抜いているんです。これでもう撃てません。」

ハヤテは慣れた手つきで銃を分解し、重要な部品であるボルトを引き抜いた。

「これでもう撃てません。さあ、行きましょう。」

しかし、4人はその様子に啞然とするばかりだった。

## 意外（後書き）

新一のハヤテへの呼称をハヤテに統一します。  
御意見・御感想・御批判、お待ちしています。

ハヤテと新一達は、最初時計塔へ行き平次やヒナギクと合流しようと考へた。ところが、泉の病状が思つたより悪化した。

「まずいぞ！ 泉の顔色がさらに悪くなっている……」

理沙が泉の顔を見て言う。実際泉の顔色は悪くなる一方だつた。止血も一応はしたが、あくまで応急処置だからどこまで通じるか新にも不安だつた。もしかしたらまだ出血が続いている、もしくは体内のどこかで出血しているかもしれない。

「一いつやあ手近な場所で休ませたほうがいい。」

新一はそう判断せざる得なかつた。といつても、まさかその場に下ろすわけにもいかない。かといって、むやみに校舎に入るのも危険である。

それに対してハヤテが口を開いた。

「危険ですけど保健室へ行つて見ますか？あそこならベッドもありますし。」

ハヤテが提案した。保健室は職員室と同じ校舎にある。先ほど職員室へ行つたとき、犯人グループらしい人影はなかつたから安全かもしれない。なにより、保健室ならベッドもあるし、薬や包帯も充分あるだろう。

それに加えて、泉をおぶつている美希、そして理沙もクタクタで

あるからよつ近いそちらに行つたほうが良いかもしねない。

新一も賛成する。

「そうだな、よし、行こう。」

こうして、5人は保健室へと行き先を変更した。

校舎に入ると、相変わらず人影も、人の気配もなかつた。

長い廊下を歩いて保健室へと向かう。

「泉、もう少しだからな。」

美希が泉を励ます。

「3人とももう少しですからがんばってください。」

ハヤテも生徒会3人娘を気遣う。

そして保健室まで着いたが、扉の前で新一が止まる。

「どうしました?」

ハヤテが訝しげに聞く。

それに対し、新一はこう答えた。

「中に誰かいる。」

さて、新一が白皇学院の中にいるということを露も知らない捜査一課の面々は練馬の捜査本部に到着した。

状況説明の捜査会議が終わり、高木、佐藤両刑事は田暮警部から命令を受けた。

「すまないが参考人として、この人物から話を聞いて欲しい。これが住所だ。向こうには既に連絡を取つてある。頼んだよ。」

そう言って写真と住所が書かれた紙を渡され、一人は出かける事になった。

移動中に一人が話し合つ。

「今回の事件はいつも増してヤバイ事件のようですね。」

高木が捜査会議のことを思い出として言つ。

「そりやそろよ。向こうの状況が全くわからないのよ。それなのに早急な解決が必要だなんて、お偉いさんも無茶を言つてくるわよね。室井管理官も本当に気の毒よ。」

「それに加えて、慎重な捜査ですからね。」

今回の事件の解決に対し、警察上層部は出来るだけ慎重な解決を要請していた。

彼らの脳裏には、数年前のチヨチヨン共和国で起きた悪夢を絶対に起してはならないという呪縛があった。また、自衛隊が出動するような事態だけは避けたかったのだ。

今回の事件捜査の指揮を取る室井管理官は、捜査会議でそれらの事項を伝達しつつ、全捜査員への拳銃携帯命令と、捜査員、特に所轄の捜査員に大幅な捜査権限を与えていた。

「室井管理官は本当に所轄署びいきですよね。」

「そんな風に言つもんじやないわよ。私たちだって元は所轄にいたんだから。」

「それもそうですね。」

苦笑いしながら言つ高木。

「ところで、この渡された写真と住所一体どういふことでしょうね？明らかに写真の人物は中学生ぐらいの女の子ですし。住所は練馬区東側全部つてどうこうことでじょうか？」

先ほど田暮から渡された写真と紙を見ながら呟いた。

[写真には白皇学院の制服を着た少女が写り、紙には練馬区東側全部と門の入り口の位置が簡単に記されていた。]

「さあー？まあ行ってみればわかるでしょ。」

そして、到着した門に掲げられていたのは

三千院。

その門だけでもすごく大きい。

「「すゞいーーー」

二人とも驚きの声を上げた。

S Pに用件を伝えると、屋敷の位置を教えられた後、門が開けられた。

門から先、屋敷まではずいぶんと距離があった。

「「」本当に東京ですか？」

高木が言つ。

「信じ難いけどそうでしょうね。」

そう答える佐藤の声も驚き混じりだ。そんなことをしている内に、  
屋敷に着く。

屋敷の前に車を止め、二人は玄関へと向かう。

しかし、一人が扉の所に着く前に、扉が開いた。

そして、中から出てきた人物を見て、二人は言つた。

「「メイドさんだーーー」

## 外と中（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしています。  
なお、時々踊る大捜査線ネタが出ているのは作者の趣味です。

新一は警戒しながら少しだけ保健室の扉を開いた。そして、そこには見覚えのある人物がいた。

「服部じゃねえか！－それに灰原も！－」

保健室の中にいたのは平次だった。他に大人が一人と袁までいた。

「おめえら一体何やつているんだ！？」

時計塔にいたはずではなかつたのか？

一方で、新一の後ろにいたハヤテは2人の大人を見て驚いた。

「桂先生に薰先生！－無事だつたんですねか！？」

2人の大人は雪路と薰だつた。

彼らが何故ここにいるのかといふと。まず、平次は負傷した和葉を運んできたためである。薰と雪路はオーバーヒートした探偵団の3人を保健室に運び込んだ所で事件が発生し、身動きがとれなくなつていたのだ。もちろん、袁も同様の理由であつた。

「和葉ちゃんも負傷したのか！？」

平次から和葉がケガしたと言われ、新一が悔しそうに言つ。

「なんや！他にもけが人があるんか？」

平次の言葉に、新一はベッドに降りた。ついでいた泉を田で指す。

その泉に対し、ハヤテがときぱきと処置をしていく。

「ハヤテ、お前随分と手馴れているな？」

その手際のよさに、新一が感嘆の声を上げる。先ほどの泉への応急処置も自分よりハヤテがやつた方がいいんじゃないかと思つたぐらいいだ。

「借金取りから逃げている間は病院にかかりませんでしたから、自分である程度処置できるよつて、ある程度の知識と技術は身に付けています。」

もうその言葉に、誰も驚きはしなかつたが、それに関わらずハヤテは泉への処置を終わらせ、その後ハヤテは和葉の分も行った。

「できる限りのことはしました。けど、お一人とも出血が激しく、輸血が必要だと思います。早急に病院に送るべきです。じゃないと危険です。」

ハヤテの結論である。

「しかし綾崎、出口はみんな封鎖されているんだぞ……どこから外に出すつて言つんだ？ おまけに、小銃を持っているような連中だぞ。もつと強力な兵器だつて持つているかもしれないぞ……。」

そう反論するのは薫だ。

「一步間違えば、木つ端微塵になっちゃうかもね。」

ボソッと、すじいことを呟いたのは哀だ。

その彼女を、新一が睨む。

「策はあります。」

ハヤテが自信満々に言った。もちろん、全員が驚く。

「え！ 本当なの綾崎君！？」

「一体どんな方法を使う気かなハヤ太君！？」

「まさか空飛ぶっていうんじゃないやうな！？」

3人（雪路、美希、平次）の言葉に、ハヤテは笑いながら答えた。

「まさか。あれを使つんです。」

ハヤテは窓の外のある物を指差した。

捜査本部では、白皇学院突入のためのある方法が議論されていた。

「下水道だと！？」

管理間である室井警視正が目の前の3人を見つめる。

2人は背広を着た男女で、明らかに本庁から派遣された刑事であるのがわかる。

しかし、もう1人の女性は明らかに場違いな格好をしている。彼女が着ているのはエプロンドレスにカチューシャという、秋葉原や漫画で見るような典型的なメイド服なのだ。

お分かりの人もいるかもしれないが、彼女は三千院家のメイドであるマリアだ。

「はい、こちらのマリアさんは元白皇学院高等部の生徒会長だった人物で、学校内の事情に詳しいです。」

佐藤が言つ。

「白皇学院内の下水道は学院外を流れる下水管と複数直結している。ですが、その大きさは災害時の水路もかねていますので、大人が数人ならんで歩いても余裕があるほど巨大です。ここからなら入れるのでは？」

マリアのその言葉を聞いて、室井は目をつぶつて考え込んだ。

しかし、他の捜査員たちは明らかに胡散臭そうな、馬鹿にしたような目で彼女を見ていた。まあ、固い人間から見たら、外見からして彼女を見下すかもしれない。

しばらく考え込んだ後、室井が口を開いて言った。

「高木巡査部長。」

「はい……」

「すまないが、下水局に要請して、大至急この付近の下水道の地図を取り寄せてくれ。」

「きなりの命令に、高木は少しばかり驚いたが、すぐに敬礼すると部屋の外へと走つていった。

「室井管理官……」

周りの捜査員たちが色めき立つ。

「本当にそんなことを実行なさるのですか！？」

一人の捜査員の言葉に、大方の捜査員が頷いた。だが、室井は全く気にもとめない。

「他に策が無い以上、考慮する価値はある。もし不満なら、もっと良い策があるのかな？」

その言葉に、他の捜査員は黙つてしまつた。

「S.A.Tならびに機動隊に出動準備を命令！」

捜査本部が慌しく動き出した。

マリアは一人それを呆然と見ていたが、すぐに彼女に室井が声を掛ける。

「あなたにはまだ聞くことがあるかもしません。申し訳ないが、しばらく我々の捜査に協力して欲しい。」

室井はマリアにやさしく、捜査協力の要請をする。それに対しマリアは、雰囲気的に頷く。

「は、はい。」

「ありがとうございます。佐藤警部補、彼女を頼む。」

「はい。」

事件は大きく動き始めた。

## 進展（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしています。ただし、室井さんを出したことについては、一切文句は受け付けません。

## 脱出

捜査本部に、下水局から白皇学院付近の下水管の図面が届けられた。

「白皇学院から外に繋がつていて、人が通れる大きさの下水管は東西南北から一本ずつ伸びています。いずれも、完全装備のS.A.T隊員が通れるだけの余裕があります。」

「S.A.Tと機動隊が突入できるのにどれくらいかかる?」

室井が部下に聞いてみる。

「後30分もあれば充分です。しかし、内部の状況が分からぬでですから。不用意にS.A.Tを突入させるわけには行きません。敵のど真ん中に出たらアウトです。」

確かに、もし敵のど真ん中に出たらまずい。特にマンホールからは一人ずつしか出れないから、もし攻撃を受けたら即全滅という洒落にもならないような事態に陥りかねない。

「せめて、もう少し内部の様子が分かればいいのですが。」

一番良いのは上空からの俯瞰撮影（真下向きに撮影すること）なのだが、下手に警察のヘリを近づけるのも危険である。

「なんとかならないものかな?」

その時、一人の捜査員が手を上げた。

「意見でもあるのかね？」

「はい。確かに警察のヘリだつたら警戒されるかもしだせんが、民間のヘリなら大丈夫じゃないんでしょうか？」

一方、保健室の新一達はといつと。

「下水道から脱出するか。いいアイディアだと思ひついで。」

新一も経験あるだけに、直ぐに賛成した。

他のメンバーは最初渋い顔をしていたが、新一のこの言葉と、他に方法も思い浮かばなかつたため、結局は賛成した。

そして、問題は誰が行くかである。もちろん、すぐにでも病院に連れて行かねばならない和葉と泉は外へ出さねばならない。つまり、誰かが背負つていく事になる。ただし、万が一を考えて一人か二人がついていく必要がある。

「じゃ私が行く！！」

いの一番に手を上げたのは雪路である。その顔は笑顔満面だ。明らかに、とつとと逃げたいという下心が丸見えである。

それを見て、薫が言つ。

「お前、生徒見捨てて逃げる氣だな。」

ギク！－

といつ擬音が聞こえると思えるぐらいに、雪路の顔が真っ青になる。

「んな分けないでしょ！－私は教師なのよ！－」

しかし、ハヤテ達はす”い疑いの目で見ている。

「つーー何よその目は！－先生を馬鹿にするな！－」

雪路がいつもどおり喚き始めたが、全員そんなものは無視する。

最終的に相談した結果、平次と和葉、生徒会3人娘が外へと脱出することとなつた。この内、和葉を平次が、泉を理沙と美希が交代で背負つていくこととなつた。

ハヤテが手馴れた手つきでマンホールを開けた。

「服部、頼んだぞ！－」

新一としてはけが人を早く運んでもらいたいし、それに加えてなんとしても外とのコンタクトが必要だった。

「おお、まかしどきや。」

「花菱、朝風、瀬川を頼むぞーー！」

薫が3人を見送る際に言った。

5人が下水道に潜ると、新一とハヤテが素早くマンホールをしました。しかし、一人にも心配があった。それは5人が迷わないかということだ。しかし、最終的にそれは杞憂で終わることとなる。

5人の無事を祈りつつ、見送った新一とハヤテは、保健室で未だ気絶している3人を、雪路と薫にまかせて、哀を引きつれ、再び時計塔へと向かつた。

その途中、ヘリコプターが飛んでくるのが見えた。

「警察！？」

新一は少しばかり期待したが。

「いえ、普通のヘリです。偶然この上を飛んでいるだけでしょう。」

ハヤテの言葉に、少しばかり落胆したのであった。

捜査本部にヘリからデータ送信で白皇学院の写真が送られてきたのは30分後であった。

「赤外線撮影の結果、1ヶ所に多数の熱源反応があります。恐らく、かなりの人間が集められていると思われます。」

室井はその写真を眺める。確かに、その校舎の部分だけ反応が強い。

「他には？」

「数箇所で人間の物と思われる反応がありました。生徒のかまではわかりません。ただ言えるのは、S A Tが使える出口は2箇所のみですね。その2箇所には人の反応がありません。」

と、その時一人の刑事が部屋に走って入ってきた。

「室井管理官……！」

「なんだ……会議中だぞ……！」

一人の捜査員が叱責する。しかし、その刑事はそれにも関わらず、室井の前までやつて來た。

「下水道を通じて白皇学院から5人の男女が脱出してきました。内2名は重傷者です。」

「何……！」

御意見・御感想・質問・御批判お待ちしています。

## 駆け引き

平次たちが下水道を使って外への脱出を果たしたニュースは、犯人グループのTの下にも届いていた。

「下水道を伝うとは考えたな。」

感心するT。

「感心している場合じゃありませんよ。同様の方法で警察が来るのも時間の問題ですよ。」

仲間の一人がそう言った。

「それもそうだ。白皇の解散を取り付けるまではいかなかつたが、まあ生徒2人が死んで、テロリストの侵入を許したんだ、あのキリカといえど辞職は確実だな。一応目的は達成した。ようし、俺たちも脱出にかかるか。それと、念のためだ。警察の足止めもやつておこう。」

Tはそう言うと不敵に笑った。

さて、一方平次たちを送り出した新一・ハヤテのグループは、その後時計台へと向かい、蘭やヒナギクたちのグループと合流した。

これで残っているのは新一、ハヤテ、蘭、ナギ、ヒナギク、千桜、愛歌、キリカの8人となつた。ちなみに、探偵団に哀、薰と雪路は

保健室に隠れたままだ。

「泉達、上手く外に出られたのかしら？」

「和葉ちゃん大丈夫かな？」

友を気遣う気持ちは皆一緒にだった。

「そして問題はこれからだな。」

新一が言つ。いつまでもじつじつしているわけにはいかない。

「いつそ私たちも下水道から逃げるか？」

そう提案したのはナギである。

蘭や瑛祐、キリカ、千桜に愛歌もそれに賛成した。新一やハヤテは賛成でも反対でもなかつた。

しかし。ヒナギクは断固反対した。

「私は敵に背を向けるなんて出来ないわ。目の前で生徒たちが苦しんでいるのに、生徒会長が逃げ出すなんて絶対にだめよ。例え一人になつても私は戦つわよ。」

負けず嫌いなのか、それとも生徒会長としての使命からなのか。

もちろん、新一達は真っ向から反対した。あまりに危険である。新一は探偵として危険なことへ他人を巻き込みたくないなかつたし、ハヤテはヒナギクがいくら強くても、相手が銃を持っていては勝ち目

がないと思つたからだ。

「相手は銃を持っているんですよ。危険です。」

「そうよ。」

「考え直してください生徒会室。」

新一やハヤテ以外の全員も口々に同じような心配をする。しかし、そんな忠告に耳を貸すほど、彼女の信念はやわではない。

「相手が何者であろうと、この白皇の平和を乱す者は私が許しましないわ。それに・・・・・正宗・・・」

彼女が呼ぶと、次の瞬間には一つの木刀が彼女の手に納まつっていた。

「この正宗があれば大丈夫よ・・・」

もうすでに新一達は驚きはしなかつたが、それでもみすみす彼女を危険に赴かせることも出来ない。

こうして、新一やハヤテ達によるヒナギク説得工作が始まったのであった。だが結局この説得は失敗することとなり、やむなく新一やハヤテ達は妥協案を提案することとなる。

時計塔最上階の生徒会室がごたごたしているところ、外では下水道

からの突入作戦が始められていた。

「「ひから草壁、これより突入する！！」

SATの草壁隊長を先頭に、SAT、機動隊が下水道に突入していく。

しかし、この順調に見えた突入作戦。開始後3分で躓いた。

下水道の奥から突如、ズドーン！…という爆発音がしたからだ。

「何だ！？」

突入した警官たちが驚きの声を上げた。

「どうやら下水道内で何か爆発したらしいな。」

草壁はそう判断した。

地上で指揮を執る室井は報告を受けて迷った。危険であるから、一端作戦を中止するかと。しかし、時間はもうない。これいじょうの遅延は許されない。室井は部下を信じてみる事にした。

「作戦は続行だ！！ただし、爆発物が仕掛けられていないか警戒しながら進めよ。」

結局、室井の判断に従つて突入作戦は続行された。

だが、いつ爆発するか、またどこに仕掛けられているかわからぬいのでは、常に警戒をしなければならない。おまけに、スピードを

ダウンせざる得ない。こうした行動は大幅な時間のロスとなつた。

しかし、その後いくら進んでいっても爆発物は仕掛けられていなかつたし、また何かが爆発した痕跡もなかつた。

これは後に判明することがだが、実は犯人たちは爆発物を爆発させたのではなく、それに近い音を下水管内で鳴らしたのである。

これなら直接足止めは出来ないが、スピードは大幅に鈍ると読んでいたわけだ。

この犯人の罠によつて、当初下水道突入10分後には校舎に突入するはづが、実に40分以上経つてからになつてしまつた。

もつとも、それは爆発物を警戒していたばかりではない、途中で予期せぬ事態が起きたからだ。

## 駆け引き（後書き）

御意見などを待ちしております。

結局、負けず嫌いのヒナギクは一步も譲らなかつたため、新一達は妥協案を提案するしかなかつた。

「仕方ない。じゃあ俺は残ります。あなた一人だけ残すのは、探偵として許されませんから。」

新一が提案した。

「だつたら僕も残ります。お一人だけではやっぱり危険です。」

ハヤテも気遣いのつもりで提案した。ところが、この一人が残る事に蘭とナギが猛反発した。

「新一危険よ！…だつたら私も連れてつてよ…！」

「ハヤテ、私をほつたらかしにするのか！？そんなの許さん…どうしてもお前が残るなら私も残る…！」

新一とハヤテの提案はこの二人の頑固心にも火を注いでしまつたようだ。

もちろん、新一もハヤテも二人を連れて行くなんて論外だ。特にハヤテは主であり絶対にナギを傷つけてはならない。銃を持つた相手の側に連れて行くなど自殺行為であつて、執事失格である。

「なん」と出来るわけないだろ…！」

「お嬢様。さすがにその命令は承服いたしかねます。」

さりに、ヒナギクも反対した。

「そうよ。私だって部外者である蘭さんや、来ても足手まといになるだけのナギを連れて行けないわよ。」

ヒナギクが言つた足手まといと、葉に、ナギはカチンと來たらしい。

「何！…だつたら私が足手まといでないことを証明してやる…！」

ナギは完全に譲らない態勢に入つてしまつた。

「お嬢様が意地張つちゃつたよ。」

ハヤテが頭を抱える。…「うなると、もう梃子でも動かない。

最終的に、新一とハヤテは適当な所で3人を置いていくことにして、今は取りあえず連れて行く事にした。

「わかつたよ。」

「わかりました。」

というわけで、脱出るのは千桜、愛歌、キリカ、瑛祐の4人となつた。新一とハヤテは4人に保健室の雪路たちと合流して脱出するよう言つて、自分たちは犯人がいると思われる北校舎へと向かつた。

下水道から突入したS A Tと彼らが鉢合わせし、大混乱が起きる事になるのはそれから20分後のことであった。

さて、残ったメンバーを送り出した5人は北校舎へ警戒しながら近づいたが、移動中も新一とハヤテは話し合っていた。

「で、どうする? どうやってあいつら置いていく。」

「適当な所で気を失わせるか何かするしかないと思います。」

「だよな。」

幸いと言おうか、新一は今日時計型麻酔銃、10連発バージョンを持っているから、隙を突いて彼女らにこれを打ち込むつもりであった。

「二人とも何話しているの?」

ヒナギクが不審に思つて聞いてきた。

「「いいえ何にも!」」

二人はなんとか誤魔化した。

しかし、世の中そういう都合よく動く物ではない。

新一とハヤテは3人に隙が出来ないか気を配つていたために、警戒が疎かになつていた。そのため、人に近づいていたのに全く気付けなかつた。

角を曲がろうとした所で、覆面を付け、銃を持った2人組にぱつたり出会ったのはまさにその時であった。

「「「「「うわああ……」」」」

「「「「「うお……」」」」

どちらとも飛び上がるんばかりに驚いたが、探偵の新一や常に正宗を使えるようにして身構えていたヒナギクは正気に戻るのがコンマ数秒だが速かった。

新一は一人の持っている銃を弾き飛ばした。相手が銃を飛ばされ困惑している間に、ハヤテが得意の蹴り技を繰り出して倒す。

「グハ……」

一方で、もう一人は仲間が倒されるのを呆然と見ながら、次の瞬間には正宗を持ったヒナギクによつて瞬時に倒されていた。

「うわ……」

戦場での生死は、一瞬で決まる。

\* じじは白皇学院です。

じつして、新一とハヤテ達は2人組を倒すことに成功した。

ヒナギクが倒された二人に近づき、覆面を剥がした。すると、彼女は驚きの顔をした。

「嘘！？」

「どうしたんです。」

新一が怪訝な顔をする。

「この人。確かに今年白皇をやめた先生よ！—！離任式で見たから間違いないわ！—！」

「——何だつて！—！」

## 最悪の幕切れ

「どうして白皇の先生が？」

「これにはさすがのハヤテも訳がわからないという表情をした。

「とにかく、この2人を何とかしないと。」

新一が言つ。

「けど、私たち繩とか手錠とか、こいつらを捕まえておく道具なんか持っていないぞ。」

そうナギが言つた時である。

「君達、何をしているんだ！？」

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

その声に驚く5人。5人が振り返ると、そこには突入してきていたS.A.Tの隊員が立っていた。

白皇学院占拠事件は、思わず方向へと動いていた。

「いない！？」

捜査本部で待機していた室井管理官は部下からの報告を聞いて眉をしかめた。

「はい。突入したS A Tと機動隊からの報告によると、監禁された生徒・教師以外の人間以外は確認できなかつたそうです。なお、生徒2名、教師1名、専属警備員3名の遺体が発見されました。」

最悪の報告だつた。6人の犠牲者を出して、逮捕できた犯人は0。それどころか、誰が犯人かもわからない状況だつた。

「なお、脱水症状や精神障害をきたしている生徒も30人以上に登ります。事情聴取も直ぐには出来ない状態です。」

「そうか・・・わかつた。ただ、事情聴取は出来るだけ早く進めたい。」

「しかし、事件は既に公になつています。白皇は財界や政界の人間の子息が随分います。下手に無理な捜査をすると、影響が出かねません。」

部下のその言葉に、室井は強い口調で言った。

「そんな物を怖れていたら、犯人が逃げてしまう。我々は一分でも一秒でも早く事件を解決する必要がある。責任は私が取る。やるんだ。」

「・・・わかりました。」

その刑事は行動を移すべく退室していった。

「・・・死者6人か・・・」

室井は誰にも聞こえないように呟いた。

一方、警察に保護された5人はといつと。

「いつまでここに待たされるのだ！？とつと今日は屋敷へ帰りたいのだが。」

ナギが痺れを切らしていた。

「ナギさん。事件に関係した者は事情聴取を受けるのが普通ですよ。

」

新一がナギを諫める。

「けどナギの言う事もわからなくないわよ。待つていてって言われてからもう一時間も経つのよ。」

ヒナギクも不機嫌そうに言う。ちなみに、5人が待たされているのは生徒会室だ。というか待たされているというより、ここで待つていたいと提案したのはヒナギクだ。

「2人ともそうは言いますが、僕らは事件の当事者です。それに怪我した瀬川さんや人質になつた他の人を考えれば、一刻も早く事件

が解決するように協力するべきでしょう。」

今度はハヤテが言った。この言葉に、2人は文句を言ひのをやめた。

「それにしても新一、今回の事件は一体どうなつていいのかしら？」

蘭が新一に尋ねる。

「わかんねえよ。情報が少なすぎる」

さすがの名探偵も、全体を把握できていなければなんともならなかつた。

「けど本当にえらい事になりましたね。まさか白皇学院が占拠されるなんて。しかも怪我人が出たとなると、しばらく学校は休校になるんでしょうか？」

「おそらく、警察による捜査が行われるだろ?」

ハヤテの問いに新一が答える。

この時点では5人は死者が出ている事や、犯人一味が忽然と消え去つていたことは知らなかつた。

「それにしてもわからないわ。どうして先生が犯人グループに入つていたのかしら?」

ヒナギクが先ほどのことを思い出し言ひ。

「それは、これから警察が取調べしてわかるでしょ。」

新一のその言葉に、ナギが言った。

「お前、名探偵って割にはあまり役に立っていないな。」

「お嬢様！！」

さすがにハヤテが咎める。

しかし、新一は笑いながら言った。

「良いんだよ。実際そうだし。」

ヒナギクがいつもの癖で言った。

「いやあ、お待たせしてすいません。」

新一と蘭には聞き覚えのある声だった。

「高木刑事！！」

なんと警官を連れて入ってきたのは、警視庁捜査一課の高木涉刑事だった。

「えー？ 工藤君に蘭さん。なんでここに？」



## 事件の波紋

高木刑事と新一・蘭が鉢合わせするという奇妙な事態になつたが、取り敢えず事情聴取が行われた。聞かれたのはそれぞれの行動とだいたいの時間といった型通りの質問であった。結局、この日は時間が遅くなつたこともあり、それで終わりとなつた。

全員に帰宅命令がでるなか、新一だけは留まつて事件捜査協力を申し出た。ただし、日暮警部たちも大規模事件捜査のためもあつてか、直ぐに民間人を捜査に加えるわけには行かず、結局休みみなさいという意味をこめて、翌日の朝から参加して欲しいということとなつた。

こうして取りあえず、新一やハヤテたちの長い一日は終わつたのであつた。

2日後、警視庁に呼ばれたハヤテの姿があつた。もちろん捜査協力で呼ばれたのである。ただし、同じく呼ばれたナギの姿はなかつたが。

「お嬢様の引きこもりには困つたもんだよ。」

通された部屋で、聴取に来る刑事を一人待つてゐる間ハヤテは愚痴つた。ナギは警察に呼ばれたにも関わらず、「言つ事はこないだ全て言つた。」と言つてきかず、結局この日風邪と偽つて（つまり

仮病（屋敷に籠つたままだつた。

ナギに仕える執事として、ハヤテの悩みは日本海溝よりも深い。

もつとも、まもなく刑事がやつてきたため、ハヤテにはそれ以上愚痴つている余裕はなかつた。

この時の質問は前回よりも深く突つ込んだ形だつた。例えば、目撃した犯人の声や体系はどうであつたか。動きはおかしくなかつたか。朝学校に行つた時に不審者を目撲しなかつたか等であつた。

これらの質問に、ハヤテは思い出せる限りのことになるべく丁寧に細かく説明した。この事情聴取はおよそ1時間で終わり、ハヤテは帰れることとなつた。すると、部屋を出ようとしている彼に、取調べをしていた女性刑事は言つた。

「疲れたでしょ、何か飲み物でも飲んでいいかい？」

丁度話をしていて喉も渴いていたので、ハヤテはこの申し出を受ける事にした。

「じゃあお煎葉に甘えて。」

そして2人は廊下に出た。そこへ、声を掛けられた。

「あれ、ハヤテじやん。」

「あ、新一君。」

新一が立つていた。

「なんだ、取調べか？お嬢様はどうしたんだ？」

「ええ、そうです。お嬢様はちょっと風邪を引いて。君のほうは？」

「俺は捜査協力。」

2人が親しく話すのを見て、女性刑事は少し驚いていた。

「あら、あなたたち顔見知り？」

「佐藤刑事、こいつが俺と一緒に外へ信号を発信した綾崎ハヤテです。」

すると、佐藤は何かを思い出した表情になった。

「そういえばそうだったわね。ところであなたも何か飲む？」

「いただきます。」

3人は喫茶コーナーに移動し、自販機で飲み物を買って一休みした。

「しかし今回の事件で白皇学院は大変なことになっちゃってるわよね？」

「ええ、授業も再開の日処が立たなくて。」

ハヤテは佐藤刑事の言葉に少し俯くように答えた。

今回の事件では、死者が6人も出てしまいおまけに泉のような負傷者も数人出ていた。また、生徒や教師の死に対する精神ダメージや、人質となつたことによるショックでカウンセリングを受ける必要が出ている人間は数十人に上つてゐる。

また警察の捜査も引き続き続いているから、とてもではないが授業など続けられる筈がない。結局、2週間を日処に、現在白皇学院は休校となつてゐる。

「けど学院の存続さえ危ういんだろ?」

そう指摘したのは新一である。

「ええ、それも心配ですよ。もしかしたらどこかへ転校する必要が出てくるかもしませんし。」

今回の事件で白皇学院、とりわけ理事長のキリカに対する世間の非難は凄まじい。特に、生徒の父兄からの物が激しい。

一応名門校である白皇学院には、政界や財界において重要な役職を占める人間の子供たちが何人も通つてゐた。また、白皇学院自身そう言う所からの寄付を受けていたし、それに応える形で万全の警備体制を取つてゐた。

ところが、いざ蓋を開けてみたら警備はあつさりと突破され教師と生徒が殺されるという事態になつてしまつた。これで父兄から文句がこないわけがない。連日キリカは頭を下げて謝罪しているようだが、一度失つた信頼を取り戻すのは容易ではない。

「ニュースじゃ 理事長の罷免は避けられないとか言ってたよな？」

「ええ。ところで、犯人についてなにか手がかりを掴めたんですか？」

ハヤテのこのセリフに、新一と佐藤刑事は渋い表情になった。当たり前だ、捜査情報について聞かれているのだから。

だが、ハヤテも部外者ではない。新一はそう思ったようだ。

「わかつた教えてやるよ。」

## 犯人一步手前

「今のところ、もつとも有力視されている容疑者はあのキリカ理事長と折り合いが悪くて辞職した教師の内の5人。その5人は俺たちが捕まえた2人とも面識があつたし、ここ最近何度も電話を掛けている。」

「その5人は捕まつたんですか？」

ハヤテが質問すると、佐藤刑事が首を横に振つた。

「それがまだなのよ。5人とも行方不明よ。」

しかし、行方不明ということは逆に怪しいということではないのかと考へるハヤテ。

「他に容疑者はいなんですか？」

「他には、ADSのシステム開発者を洗つていてるけど、その中には容疑者らしい人間はいなかつたね。それにみんなアリバイがあつたし。」

ADSとは白皇学院に張り巡らされたコンピューター警備システムだ。

「ADSがどうして作動しなかつたかはまだ不明よ。けど、1週間前にコンピューター会社が調べたときには異常なかつたそうよ。それにおかしな点があるのよね。」

「おかしな点?」

「そう。実はADSに残された記録を見た限りじゃあの日誤作動を起こした形跡が全くないのよ。つまり、正常にシステムは動いていた。」

「ということは、つまり犯人はADSに気付かれずに侵入した事になる。」

「じゃあ犯人は教師か生徒、もしくは警備員の中にいたんでしょうが?」

それが妥当な考え方である。

「それは俺たちも考えた。けど、なにしろ人数が多くて調べるのに時間喰つてるんだよね。」

と新一が言つた時である、田暮警部がやつてきた。

「おい、工藤君に佐藤君。有力な情報が出たぞ。」

その言葉に、新一と佐藤刑事の表情が変わった。

「有力な情報つてなんですか、警部?」

「それはだ。あのADSシステムは一応白皇学院が運営する独立型運転システムになっている。しかしだ、白皇学院内にあるパソコンで暗号を打ち込めば繋がることが可能らしい。もちろん、理事長室にあるマスタースイッチに触る事なしでだ。そしてその暗号を知っている人間は、キリカ理事長を除けば2人しか知らないらしい。」

「その2人って誰ですか？」

新一と佐藤刑事が日暮警部に詰め寄つた。

「校長と教頭の2人だけだ。この内、校長は白だつた事がわかつて  
いる。と、なると残されるのは教頭だ。」

これは有力な情報である。

「しかしだ。」

日暮が表情を険しくした。

「どうかしたんですか・」

「うむ。教頭は相当用心深い人間らしい。今のところ犯人と教頭を  
結びつける物的証拠が何一つ出でていない。」

なるほど、裁判では物的証拠がなければ話にならない。どんなに  
状況証拠があつても白を切られたらお終いである。

と、そこでハヤテが手を上げた。

「何かな？」

「あの、学院内にあるパソコンの履歴つて調べましたか？」

「いや、そんなことはしてないが。なんでそんな事を聞くのかね  
？」

機械音痴の田暮はハヤテが何故そんな質問をしたのかわからなかつた。

「田暮警部。パソコンには通常履歴という物が残されます。例え犯人が履歴を削除しても、もしかしたらどこかに痕跡が残っているかもしれません。」

「けど、工藤君。ADSには何も不審な点はなかつたわよ。」

「じゃあ佐藤刑事。今回の調査でADSの履歴は調べました?」

とそこで佐藤刑事は気付いた。今回の事件ではADSが独立システムである事を鵜呑みして、他所から繋がつた履歴を調べてはいい。もちろん、先ほど田暮警部が言つたとおり、他のパソコンなら尚更だ。関係ないとして切り捨てている。

完全な警察の落ち度である。

「例えADS側の履歴には何も無いよう仕込んでも、学院のパソコンの方になんらかの痕跡が残つているかも知れません。まあそれもなかつたらお終いですけど。」

「よし、急いでパソコンに明るい人間を集めるんだ!! 捜査のやり直しだ!! それと、白皇学院に急行だ!!」

ハヤテは携帯を取り出した。

警視庁で事件の再捜査が始まったころ。白皇学院の生徒会長室では桂ヒナギクが取り敢えず生徒会の書類の片付けをしていた。

例え学校に対する世間の風当たりが強くとも、授業が休止中でも自分の責務はしつかりやるのが彼女だ。

一人黙々と仕事をしていると、エレベーターが動いているに気付いた。

(誰かしら?)

不思議に思つていると、扉が開いて教頭が現れた。

「あれ、教頭先生が来るなんて珍しいですね?」

「ああ、実は警察の方から校内のパソコンに重要な手がかりが残されている可能性があると連絡が来てね、そこでこのパソコンも提出する事になつたんだ。」

「そうなんですか?」

「そうなんだ。というわけで、持つていいくがいいかな?」

「あ、かまいませんよ。どうせ今は紙の書類を片付けていた所ですし。使つてないからいいですよ。」

ところが、その途端教頭が少しばかり一矢ついたのをヒナギクは見逃さなかつた。

( 何今の? )

嫌な予感が走つた。

「 そりか。 ジヤあ持つていいくよ。 」

その時である、ヒナギクの携帯に電話が入つた。ハヤテからだつた。

「 もしもし。 ハヤテ君? 何? 」

「 ヒナギクさん! 主犯格の人間がわかりました、教頭先生です。もしかしたら証拠隠蔽を図るかもしません。ですから見つけたら警察に連絡を! 」

「 なんですか! 」

先ほどの嫌な予感が最悪の結果となつて当たつてしまつた。そして、背後に殺氣が迫つた。

「 正宗! 」

## 犯人一步手前（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ヒナギクは慌てて木刀正宗を召喚し、構えた。しかし、遅かった。教頭は懐から出した拳銃の狙いをヒナギクにピタリと合わせていた。

「ヒナギク君。その刀を降ろしたまえ。そして手を上げるんだ。」

ヒナギクは一瞬襲い掛かるとも考えたが、ここで発砲されてパソコンに当たつてもらつては困る。直接は聞いていなかつたが、おそらく教頭が持ち出そうとしたあのパソコンこそ重要な証拠に違いない。

事実そうだつた。教頭はADSへの細工を、普段紙の文書類を多用し滅多に使われないこの生徒会室のパソコンから行つていたのだ。教師なら生徒会室へ入る姿を目撃されても目立たないし、例えパソコンをいじつていっても言い訳をしやすかつたからだ。誤算だつたのは生徒会室への人の出入りが激しく、このパソコンの履歴を完全消去出来なかつた点であつた。

「どうして…どうしてあなたが？」

「どうしてだと。君も知つてはいるだろ？あのバカ理事長のおかげで生徒や教師たちがどれだけ振り回されているか。名門校と言われた白皇学院もあの理事長のおかげで滅茶苦茶だ。だからこそその首を挿げ替える必要があつたんだ。元の、昔の平穏な白皇学院に戻すためにはね。」

教頭は表情一つ変えず淡々と言つた。

「だからって・・・人を殺して良いと思っているんですか？」

「あれは事故だ！！彼らが予想外の反攻をしたから撃つたまでだ。最初は誰も殺す気などはなかった。・・・あれはやむを得ない犠牲だ。」

この言葉に、ヒナギクの心は怒りの炎で燃え上がった。

「やむを得ない犠牲ですって！あなたのHゴのために殺しておいて。その言い草は許さない！！」

目の前の敵に向かつてヒナギクは突進を開始した。しかし、教頭は拳銃の引き金を引いた。

バンバン！

2発の銃声が生徒会室内に響き渡つた。銃弾の一発は、ヒナギクの肩を打ち抜いていた。もう一発は左腿を掠り、そこにケガを負わせていた。

「クー！」

「ヒナギク会長。君のその正義感と勇敢さは評価しよう。しかしだ、木刀ごときで拳銃弾を跳ね返せると思つたら大間違いだ。・・・個的には、君のような素晴らしい生徒は好きだつた。しかし、我々の崇高な理想を妨害する者は、何人たりとも許さない。」

教頭は拳銃の狙いをヒナギクの心臓に定めた。

「せめてもの情けだ、痛みを感じさせないよ」逝かせてあげよ。

ヒナギクも覚悟を決めて目を閉じた。

バンバンバン！

續け様に3発の銃声が鳴り響いた。

一七六

教頭の手から拳銃が飛ひ、彼の体が後ろに飛はされた。

「な、何？」

その時になつてようやく彼女は気付いた。ババババというヘルコ  
プター特有のプロペラ音に。

なんとテラスにぶつからんぐらいの位置に、ヘリが1機ホバリン  
グしていた。その中に乗つていたのは。

「ヒナギクさん、大丈夫ですか！？」

「ヒナギク！」

2人の人間がヘリの扉を開けて叫んでいるのが見えた。

# 「ナギにハヤテ君！！」

よく見ると、そのヘリコプターは三千院家の物だった。そして、ハヤテとナギに並ぶように、拳銃を構えた新一が乗つっていた。先ほ

どの銃撃は彼の物だつた。

実はナギはマリアの説得を受け、しぶしぶハヤテを追う形で警視庁へとヘリに向かつたのだ。そして彼女が着いた時と、新一達が犯人に気づいた時とが偶然に一致したのだ。

彼らは一直線で警視庁から白皇学院に飛んできたのだ。そして、時計台にある生徒会室の異変に気付き、今になつたわけだ。3分後、時計台の直ぐ側に着陸したヘリから降り立つた日暮警部と高木刑事によつて教頭は銃刀法違反、殺人未遂の現行犯で逮捕された。同時にパソコンも押収された。

こうして、白皇学院占拠事件の主犯格は逮捕された。この後、実行犯は次々と芋づる式に逮捕されていくこととなる。

一方、新一やハヤテ達はケガをしたヒナギクをヘリに乗せて三千院グループ傘下の病院に急いだ。

幸い、彼女のケガは命に關わるほどではなく、全治1か月と診断された。取り敢えず一安心である。

新一とハヤテは病院の待合用椅子に腰掛けて話し合つていた。

「取り敢えず事件は解決するだろ？けど、白皇学院が危ない状況にあるのは変わりないよな。」

「ええ、学校内に主犯格がいたといつてはより学校の責任が問われるでしょ？から。恐らく、今以上の非難を受けるでしょう。」

「お前はどうするんだ?」

「僕にはわかりません。お嬢様が決める事です。」

「そうか・・・けどまあ事件は取り敢えず解決したな。ハヤテの言葉があつたからこそ解決したようなもんだぜ。ありがとう。」

「いえいえ、新一君の頭脳方が僕の言葉よりもずっと役に立ちましたよ。」

お互いを讃えあつ2人。

「さてと、俺はそろそろ行くよ。この後も警視庁から強力を頼まれているから。」

「わかりました。また縁があつたら会いましょう。」

ハヤテのその言葉に、新一は笑つて答えた。

「なあに。人は1回会えれば結構そのあと何回も会うもんだぜ。人の縁は、永遠のものかもしれないな。」

「そうですね。一回目の出会いが永遠への出会いだったのかも。」

「そうかもな。じゃあ。」

「ええ。」

新一は行つてしまつた。1人残されるハヤテ。そんな彼に、走つてきたナギが声を掛けた。

「おおいハヤテ、ヒナギクの見舞いに行くぞーー！」

「わかりましたお嬢様。」

2人は一緒に歩き出した。

一つの出会いは永遠への出会いかもしない。その出会いが価値あるものだったのかは、彼ら自身わからない。今は

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5622c/>

---

永遠への出会い

2010年10月11日22時44分発行